

文選卷二  
二  
〔宮内庁書陵部蔵  
管見記〕紙背影印・  
翻刻並に解説

山崎誠

## 凡例

一、茲に掲げるのは、次の典籍の現存部分全巻の写真図版、並びにその模写翻刻である（表文書の「管見記」には、既に複製があるので割愛する）。

宮内庁書陵部蔵「管見記」紙背無注本文選卷第二（図書番号 特・一〇六）

一、右頁の写真は「管見記」第百五巻・第百二巻の順序に掲げ、第百二巻に含まれる「白氏文集」巻第一六断巻は割愛した。また第百五巻初行より、第三四行に至る紙面の下半、及び第百二巻の全紙に亘り、裏打が施されて甚だ鮮明に欠けるが、原姿のままを示すこととした。

一、左頁の翻刻は、可能な限り原本の面目を損わざるよう努めたが、単色版である為に、便宜以下の如き処置をとった。

(1) 翻字に当り、別体の漢字・仮名は原本の通りとし、誤写・誤脱・補入・見せ消ちも原本の体裁通りとして、何らの私意も加えていない。但し、音注・付訓に関し、已むなくその位置に若干のずれが生じた場合のあることを断つておく。

(2) 訓点には、墨・朱・角の三種があり、朱のヲコト点と墨仮名は相互に対応する。また墨仮名にはほぼ四筆が区別される。その加点順序は、小林芳規博士の御示教によれば次の通りである。即ち、墨第一筆と朱筆（第一次）、角筆（第二次）、墨第二筆（第三次）、墨第三乃至第四筆（第四次）となる。本稿に於ては、これらを弁別する表記上の手段が無く、且つ加点者もほぼ同一で、加点時期も相接していると推考されるので、墨・朱・角の三筆を区別するに止めた。ヲコト点の星点・漢字声点・音訓合符は朱筆、それ以外の仮名及びヲコト点の線点・鉤点・音訓読符・合点は墨筆の原則が認められるので、この原則に外れるもの、並びに角筆点について、翻字註に於て表示することとした。

(3) 漢字声点は原姿のまま圈点で示し、星点と容易に区別されるようにした。

(4) 破損や切損及び蠹敗の箇所では、痕跡または残画によって解説可能なものに限り、〔 〕に括って示すという形態上の変更を加えた。

(5) 同様の理由により、解説不能の箇所は、□に括って表示した。

(6) 前号の場合、九条家本・集注本等に拠り、私に文字を推定した場合、当該文字を小字で□内に填めておくこととした。

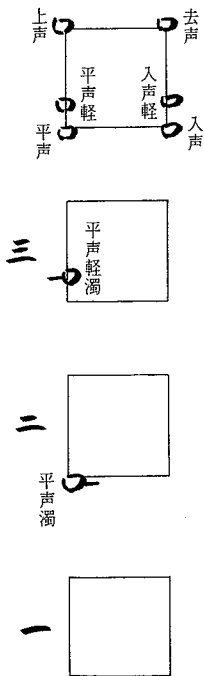
(7) 写真図版と翻字本文との対照の便宜として、各行の頭に通し番号で行数を付した。また紙継ぎの箇所を明示する為に、（第何張）の如き注記を施した。

(8) 翻字本文で正確を期し難き箇所、その他必要と認められる事柄を翻字註に記した。

一、所用の仮名字体表及びヲコト点図（小林芳規博士作成のもの）は、次頁に掲げる通りである。

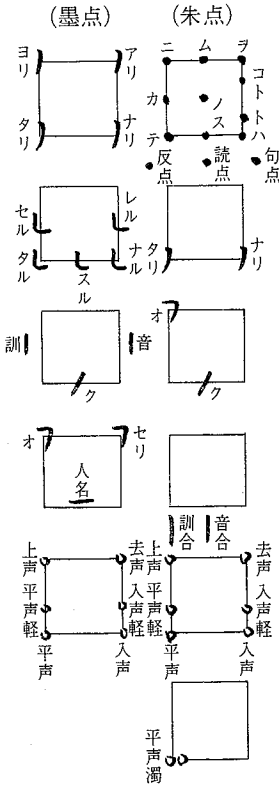
（付記）本稿作成に際し、昭和五八年七月と翌五九年三月の両度、都合六日間、宮内庁書陵部に於て原本との照合を行った。原本の披閱を願うに際し、平林盛得・森 泉両氏の御芳情を忝くした。篤く感謝申し上げます。

文選卷第二角筆点仮名字体表



ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
レ	コ 禾	ラ ヤ		マ =	ハ ナ	タ セ	カ ア			
符疊	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
コ H	井	リ			ヒ	ニ	千	し	キ	イ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		ル	ム	フ		ハ	ク	ウ		
	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
丑 丑	し		メ	マ		チ	セ	ケ	エ	
ラ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	
ラ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	

文選卷第二朱墨点仮名字体表・ヲコト点図



ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
✓	禾	ラ	ヤ	丁	ハ	ナ	夕	セ	カ	ア
	禾	ラ	ヤ	丁	ハ		夕	セ	カ	ア
云	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
云	井	リ		ア	ヒ	ニ	千	シ	キ	イ
				三	ヒ	小	千	シ	キ	イ
符疊		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
コ		ル	由	ム	フ	ヌ	...	瓜	ク	空
ニ			上							
ヒ		ル		ム	フ	ヌ	...	瓜	ク	空
ト	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
タ		シ		メ	ハ	ネ	テ	セ	ケ	エ
ク						ネ			ケ	エ
カ	ラ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
ハ	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
リ	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

(各欄上段が第一次墨仮名、下段ハ第二次以下墨仮名)

者乃懇洁服正帶（一）  
 延玉并茶會史（二）龍（三）翰（四）歛（五）深（六）鑿（七）  
 攬草屬結飛雲之（八）輪（九）樹（十）翠（十一）羽（十二）  
 高蓋達良流之（十三）火（十四）燄（十五）燄（十六）倣（十七）容（十八）衛（十九）  
 六宮之（二十）車（二十一）之（二十二）衣（二十三）履（二十四）而（二十五）帝（二十六）定（二十七）觀（二十八）  
 鞞（二十九）華（三十）鞞（三十一）金（三十二）鍍（三十三）錫（三十四）方（三十五）鏡（三十六）在（三十七）肅（三十八）劍（三十九）  
 膺（四十）玉（四十一）環（四十二）窅（四十三）聲（四十四）鐵（四十五）之（四十六）和（四十七）鈴（四十八）映（四十九）巨（五十）  
 輸戴鎧（五十一）飛（五十二）鞞（五十三）飛（五十四）鞞（五十五）羽（五十六）蓋（五十七）成（五十八）芝（五十九）路（六十）  
 曲（六十一）空（六十二）倚（六十三）時（六十四）眼（六十五）而（六十六）吹（六十七）引（六十八）我（六十九）龍（七十）旂（七十一）而（七十二）敵（七十三）  
 纒（七十四）之（七十五）戈（七十六）速（七十七）迅（七十八）豐（七十九）難（八十）落（八十一）水（八十二）犀（八十三）車（八十四）吼（八十五）  
 素（八十六）斬（八十七）並（八十八）數（八十九）璆（九十）碧（九十一）璽（九十二）璠（九十三）米（九十四）荒（九十五）青（九十六）屋（九十七）  
 奉引既畢先敵（九十八）之（九十九）發（一百）；（一百零一）鷹（一百零二）旗（一百零三）度（一百零四）  
 軒通帛（一百零五）備（一百零六）加（一百零七）上（一百零八）里（一百零九）以（一百一十）九（一百一十一）浮（一百一十二）闢（一百一十三）輿（一百一十四）車（一百一十五）子（一百一十六）  
 身（一百一十七）毛（一百一十八）也（一百一十九）蕭（一百二十）勇（一百二十一）夫（一百二十二）

12  
11  
10  
9  
8  
7  
6  
5  
4  
3  
2  
1

異義

者乃勦法服勦法服心心完完帶帶紘紘

經經五五符符其其暴暴會會火火龍龍翽翽散散滌滌輝輝

擊擊畢畢屬屬結結飛飛雲雲之之裕裕輅輅樹樹翠翠羽羽之之

集集金金梁梁鈔鈔高高圭圭豎豎辰辰一一流流之之木木紉紉頰頰愔愔曼曼容容齊齊頌頌卷卷門門

六六女女曳曳之之奔奔正正齋齋騰騰躡躡而而沛沛狀狀龍龍

朝朝萃萃賅賅金金鈔鈔鏤鏤錫錫方方左左肅肅鈔鈔

膺膺五五環環室室聲聲鏃鏃和和鈔鈔中中車車鑿鑿也也

輸輸馭馭鏃鏃飛飛輕輕羽羽蓋蓋戒戒上上楚楚管管花花也也

集集金金采采劉劉曲曲契契佞佞時時服服而而設設富富咸咸龍龍游游而而敏敏

纓纓之之戈戈迺迺取取農農輿輿輅輅木木屬屬車車尤尤

乘乘軒軒並並駁駁瑋瑋營營重重旒旒朱朱旒旒青青屋屋

奉奉引引既既畢畢先先輅輅乃乃發發寔寔寫寫旗旗皮皮

24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13

奏引既畢先鼓先鼓、奮鷹旗度奮鷹旗度  
 軒通帛備節備節、堂下元字堂下元字、開聲轉開聲轉  
 驛髦被躡馬夫驛髦被躡馬夫、擊騎馬擊騎馬、牛之牛之  
 滿梢飛流蘇之滿梢飛流蘇之、醫教醫教、然輕武於然輕武於  
 後陳奏嚴鼓之後陳奏嚴鼓之、曹嚴曹嚴、戎士介而戎士介而  
 楊揮載金鉦而楊揮載金鉦而、時、鼓、青道、報時、鼓、青道、報  
 引天行皇陳南引天行皇陳南、冒、唐、之、麟、之、冒、唐、之、麟、之、  
 殿未出乎城關殿未出乎城關、師、已、回、半、津、時、師、已、回、半、津、時、  
 感夏后之致美感夏后之致美、憲家恭於憲家恭於、見、神、見、神、  
 命乃孤竹之管命乃孤竹之管、畫和之瑟雷鼓畫和之瑟雷鼓  
 洪鼓、六變既畢洪鼓、六變既畢、冠幸兼翟列冠幸兼翟列  
 舞八佾元祀舞八佾元祀、推拜群望咸秩推拜群望咸秩、夙夙  
 植燎之突植燎之突、塲、去、高、燥、斗、黍、一、神、塲、去、高、燥、斗、黍、一、神、  
 敬馨而頌德敬馨而頌德、昨、聖、主、以、元、吉、致、後、昨、聖、主、以、元、吉、致、後、

24  
23  
22  
21  
20  
19  
18  
17  
16  
15  
14  
13

射通帛音通倚柳音柳空千九字音九屬身音身輕音輕表音表

騎耗音耗被鑊音鑊房夫戴駟駢音駟駢乘牛之音乘牛

蒲措音措飛音飛流音流鼓音鼓之音之駭音駭駭音駭武音武於音於

後陳音陳奏音奏嚴音嚴鼓音鼓之音之嘈音嘈囂音囂戎音戎士音士介音介而音而

楊搏音搏戴音戴會音會鉦音鉦而音而建音建黃音黃鉞音鉞清音清道音道披音披

列天音天行音行皇音皇陳音陳釐音釐之音之習音習之音之慮音慮驟音驟於音於

殿音殿未音未出音出乎音乎城音城闕音闕布音布已音已回音回半音半邪音邪一音一跡音跡一音一路音路一音一跡音跡一音一路音路一音一跡音跡一音一路音路

感音感夏音夏后音后之音之致音致美音美豈音豈敢音敢恭音恭於音於目音目神音神

命音命乃音乃孤音孤竹音竹之音之管音管雲音雲和音和之音之璣音璣雷音雷留音留鼓音鼓

舞音舞八音八佾音佾光音光祀音祀惟音惟揖音揖群音群望音望歲音歲祿音祿賜音賜不音不也音也鈔音鈔自音自扁音扁

檣音檣燄音燄之音之突音突煬音煬致音致高音高燦音燦半音半秦音秦一音一神音神燠音燠

第三卷



36

35

34

33

32

31

30

29

28

27

26

25

舞八佾舞八佾祀推拜望威舞八佾秩舞八佾  
 楮楮之焚楮場楮高標楮并奉神楮  
 敬馨而頌德敬馨昨敬馨聖主敬馨元敬馨宮敬馨後敬馨  
 宗上帝於明堂宗上帝華光宗上帝武宗上帝行宗上帝祀宗上帝  
 辨方倬而匹則辨方倬之精辨方倬師辨方倬而辨方倬恭辨方倬  
 尊赤氏之未尊赤氏先尊赤氏靈尊赤氏懸尊赤氏而尊赤氏允尊赤氏  
 懷於是春秋懷於是第懷於是四懷於是時懷於是迭懷於是代懷於是  
 逐逐之逐心逐感逐於逐壇逐子逐招逐邑逐香逐  
 於廟於廟桃於廟奉於廟並於廟典於廟稱於廟祀於廟物於廟牲於廟  
 辨省辨省娶辨省其辨省福辨省而辨省毛辨省豨辨省狗辨省之辨省  
 有和義有和義滌有和義濯有和義禋有和義嘉有和義禮有和義儀有和義孔有和義明有和義  
 萬萬儻萬奔萬鐘萬鼓萬望萬靈萬社萬稷萬  
 芳未頤芳未頤來芳未頤饗芳未頤神芳未頤具芳未頤醉芳未頤上芳未頤降芳未頤福芳未頤  
 饗饗及饗至饗農饗祥饗辰饗正饗土饗膏饗禱饗

36  
35  
34  
33  
32  
31  
30  
29  
28  
27  
26  
25

穰穰及至農祥農祥良良心心本本膏膏視視莫莫

考考來來願願來來饗饗神神具具醉醉止止降降福福

萬萬標標齊齊弁弁鐘鐘鼓鼓吹吹笙笙祖祖皇皇

有有和和美美滌滌濯濯靜靜嘉嘉禮禮儀儀孔孔明明

鑾鑾省省設設其其福福衡衡毛毛白白毳毳毼毼毼毼自自

善善作作約約禱禱於於廟廟袞袞舉舉者者嘗嘗適適禴禴祀祀物物牲牲

羨羨愛愛之之心心感感物物增增思思躬躬追追養養滋滋又又

櫟櫟是是春春秋秋改改節節四四時時送送代代

尊尊赤赤氏氏之之未未光光四四靈靈懋懋而而光光

譏譏方方位位而而空空則則五五精精師師而而來來推推覆覆

忘忘上帝上帝於於明明堂堂推推光光武武以以作作配配位位

馨馨馨馨而而願願德德昨昨靈靈主主以以之之吉吉然然後後





誠信乎廣遠才長皇與陽皇肇  
 於東階以頌消啓明掃朝震登  
 天光於扶桑天子乃撫王輅時乘  
 六龍發鯨魚鏗華鐘大而郊節  
 風石陪棊榻提運衡徐至於射  
 宮禮事展樂物具王夏闋駟  
 虞奏史拾既次彫弓斯敷達於  
 餘胤暮春昭誠心以遠論進明  
 德而崇業終饗養之貪慈仁  
 風行而外流誼方激而遐日月會  
 於龍猶極人事之勞夜因休力  
 以息動致惟忻於春酒執鸞  
 乃以祖割奉醜豆於團叟降至  
 尊公訓恭送迎拜乎三壽敬慎  
 哦儀亦人不偷我得嘉賓其樂

59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48

天光於扶桑天子乃極也時乘也

六龍發鯨魚鑿犂鐘大丙河鼓也

風右厲葉搗搜運也衛徐至於射也

宮禮事展樂物具王夏闕也

屢奏來拾也既池也駉弓斯敷也遠也

餘萌暮春昭誠心以遠論進明也

德而崇業也漿鬻養之貪怒仁也

風行而外流也誼方激而遐也日月層也

於龍也推也人亨之勢也救因休力也

以息勤也致推折於春酒執寧也

乃以祖宮奉聽豆於國史降也至也

尊以訓恭送迎拜乎三爵敬填也

70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59

以祖割奉鷓豆於園叟降至  
 尊公訓恭送迎拜乎三壽敬慎  
 威儀亦人不偷我有嘉賓其樂  
 愉聲教布濩瀛溢天區文  
 德既昭武節具宣三農之隙  
 曜威中原歲惟仲冬大閱西園  
 虞人掌馬先期戒事志率百  
 禽鳩諸靈固數之所同是謂告備  
 乃徠小我樞軒中由四牡既佳  
 閑戈矛岩林牙旗纛紛迓上林結  
 徒營叙和樹表司鐸授鉦坐作進  
 退第以軍聲三令五申示戮斬牲  
 陳師鞠旅教達禁成火烈鼻罍  
 武士星敷鳴鶴與飄其張鷹牙

70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59

尊以訓恭送迎拜乎三壽敬慎

政儀示人不偷我其有嘉賓其樂

愉聲敷布濶靡溢天區文

德既昭武節身宣三農之躋行

曜破中原歲推仲冬大閱西園

農大嘗焉先期裁事必率百

禽鳩諸靈園讖之所同且謂苦審

乃鄉小我極軒中田四牲既告且

開戈矛若林牙旗續紛送上林結

後營叙和樹表司鐸授鉦坐作進

退席必畢聲三令五申示戮斬牲

陳師鞠號教達禁成火烈具梁

樂

營後為

包在堂



退第以軍廣三令五申亦勅斬牲  
 陳師鞠孫教達禁成火烈鼻舉  
 武士呈數鵝鶴與飄其張翼舒  
 輒塵掩逗速疾匪徐取不詭遇  
 射不翦毛外敵六禽恃膳四膏馬  
 足未極輿徒不勞成禮三敬解  
 棄故藤不窮樂以訓儉不殫物  
 以昭仁慕天乙之施罔因敬祝  
 以懷巨纛拒伯之滑陽失能罷高  
 獲入澤曼昆蟲威振八寓好樂無  
 荒况文武薄狩于教既頊焉  
 岐陽之蒐又何足數今乃卒歲  
 令大雉驅除群屬方相事鉞至觀  
 標茨標子萬童丹首玄獻桃

82 五音震音震標拔拔振子振萬童童丹首首玄數玄數挑挑  
 81 大鏗駭鏗除除群劇群劇方相方相垂劍垂劍空現空現  
 80 坡陽之蕙蕙不何不何定數定數尔乃卒歲尔乃卒歲  
 79 才至才至北崇北崇先文武先文武薄將薄將于教于教既瑱既瑱焉焉  
 78 夫豈見獲夫豈見獲人澤浸人澤浸昆蟲昆蟲戚振八寓戚振八寓好樂好樂無無  
 77 以懷以懷巨微巨微姬伯之渭陽姬伯之渭陽失簞失簞叢而叢而  
 76 以望以望仁慕仁慕天乙之施天乙之施因教因教祝祝之之  
 75 榮放榮放麟麟不窮樂不窮樂以訓以訓微微不彈物不彈物  
 74 足未拯輿足未拯輿使使不勞成禮不勞成禮二致解二致解  
 73 射射不翦毛不翦毛外敵外敵不禽時騰不禽時騰四骨馬四骨馬  
 72 輒雲掩輒雲掩迅速迅速疾疾匿徐匿徐叙叙不詭遇不詭遇  
 71 武王皇敷武王皇敷鵠駕鵠駕魚龍魚龍其族其族翼舒翼舒居居

93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82

陽文和廢物時育卜心考祥然  
 鬼京室密清內有不建於是陰  
 對將蒙善目察區限司執遺  
 方靈作搜守以爵粟神荼副  
 光八靈為之震情况敗或與單  
 島魑與凶象之瘡野仲而鐵遊  
 耕文於清冷弱女魁於神黃殘  
 蟪魅散徧狂軒蜂地腦方良凶  
 於四爾然後凌天池絕飛梁精  
 痛必斃煙火馳而星流逐赤覆  
 孤隸穴所發無息飛礮而散剛  
 標於樞子萬童丹首玄款桃  
 大僂駢除群屬方相率鉞至觀

82 女音震 標於 振子萬重丹首玄叢

83 列棘矢所發無鼻飛礫

84 瘳物駭煌皇馳而星流逐赤痕

85 鈞自度也 鐵自鑿也 才四商 然後凌天池 絕飛梁相發

86 善家鬼 竊昧 散獨 狂 軒 踳地 方良閃

87 紺文於清 濁 女 躑 躑 神 黃 後 黃

88 決登 野 屬 臆 與 閃 象 之 瘞 野 伸 而 鐵 持 子 厲

89 光 八 靈 爲 之 震 懼 深 跼 與 畢

90 方 度 翔 作 楫 子 公 櫛 刺 擊 神 荼 副

91 焉 堇 操 致 毒 即 察 區 陳 司 執 遺

92 魁 京 室 密 清 閃 有 不 驥 於 曼 陰

93 陽 文 和 廢 物 時 首 仁 恂 若 祥 祭 然

鬼京室密清因有不懸於是陰  
 陽文和庶物時育仁孝祥終然  
 允濟乘輿巡斗位嶽勸稼穡於原  
 陸同衡律而壹朝豐齋急舒於寒  
 燠省幽明以黜陟乃又諦而回復望  
 先帝之舊墟慨長思而懷古俟  
 闍風而西恩致恭祀乎高祖既春  
 蒞以發土啓諸壑於渚之文秋警以  
 坂成觀豐年之受祿嘉田暖之匪  
 解勤致費斗九苞左瞰湯谷右  
 睨玄圃眇天未以遠明規萬世而  
 大舉旦歸來以釋勞膺多福以  
 女念懿集瑞命倫致嘉祥園林民  
 之馴震擾澤馬與騰黃鳴女林

104  
103  
102  
101  
100  
99  
98  
97  
96  
95  
94  
93

陽羨和庶物時育上俗者祥發

乞涼棄輿進乎欲歛勸稼播於原

陸同衡律而壹軌豐腐急舒於寒

燠有明以黜彼乃又旃而回邊望

先帝之舊墟掘長恩西塚古侯

脚同字闔風而西邁致恭祀乎高祖既春

遊發發生啓諸勢於潛尸又秋譽以鑿考

地也成觀豐年之夕徐嘉由暖之匪

履履又射勤致費坐九苞左瞰湯谷右

晚玄圃眇天末以遠期規萬世而東作鬼

大華以歸來以釋勞膺多福以

女念集瑞命備致嘉祥園林以

115 114 113 112 111 110 109 108 107 106 105 104

聊云匪見天之在遠耳夫  
 大業且歸來以釋勞膺多福以  
 女禽總集瑞命偕致嘉祥園林日  
 之駟虜擾澤濁馬與騰黃鳴女林  
 於春圃豐朱草於中唐惠風廣  
 被澤洎出荒北奠下零南諸越實  
 西邑大秦東過樂浪重古人之九譯  
 會稽首而來王是故論其逸邑  
 易京則同規斗殿殿改奢即儉則  
 合美乎斯干蓋封降禪則齊德半  
 黃軒為無為亭無亭永有人以  
 孔安蓮節儉尚素襟思仲尼之克  
 已履老氏之常足將使心不亂所  
 在固不見其可欲賤犀象簡珠玉

115 114 113 112 111 110 109 108 107 106 105 104

女念女場總集瑞命格致嘉祥園林氏園林氏

之駒震擾濁馬與騰黃鳴女妹

之鸞鳥丹穴之鳳皇翟莘字

於春圃豐采卓於中唐惠風廣姜范門

被澤自物荒北髮丁零南詔越嘗

西臣大秦東過樂浪重臣之九譯

禽縱首而來去是故論其遷邑

易京則同規半殿改者即檢則

含美乎斯子登封降禪非齊德乎

黃軒為無事永有以

孔安遷節檢尚素操思仲尼之克允

已履老氏之常足將使心不亂所



127 126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116

已履老氏之常足將使心不亂研  
 在目不見其可欲職辱家簡珠至  
 藏金於山根壁於谷翡翠不裂瑤  
 璵不羨所貴惟賢所寶惟較人去  
 未而反本感懷忠而抱經干斯之  
 時海內同悅曰吁漢帝之德集其  
 禱而蓋莫美為難時也故曠甘  
 不覲唯我后能殖之以至和方將  
 敷諸朝階然則道胡不懷化胡  
 不系聲與風翔翠從雲遊萬物  
 我賴亦又何求德寓天慶輝  
 烈光燭照三王之遜武誰謂遲  
 而長驅踵三皇之遐武誰謂遲  
 而不能屬東寧之轍未整值余

127 126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116

在自不見其可欲見其厚蒙簡珠玉集衆作

藏金於山山抵璧於谷璧翡翠不到翡翠琅玕琅玕

楚南瑤瑤璵不接瑤璵所貴瑤璵推賢瑤璵所寶瑤璵推瑤璵穀瑤璵去瑤璵

未而未及本未減懷忠未而抱未段未予斯之未苔未

時海內同時慨曰時呀時漢帝時之德時集其時

禮禮而禮美禮賞禮矣禮為禮難禮時禮也禮故禮曠禮世禮

不不觀不唯不我不向不能不預不矣不乎不和不方不將不

數數諸數朝數階數然數則數道數胡數不數壞數也數胡數

不不采不聲不與不風不翔不澤不從不雲不遊不萬不物不

我我賴我亦我不我何我求我德我當我之我天我震我燁我

烈烈光烈燭烈兩烈三烈王烈之烈趣烈數烈五烈帝烈

而而長而驅而踵而三而皇而之而還而武而誰而謂而駕而還而

139 138 137 136 135 134 133 132 131 130 129 128

而長驅壇二皇之選武誰謂駕遲  
 而不能屬東京之轅未聲值余  
 有大馬之疾不能究其詳故粗  
 為實言其梗概如此若乃流道  
 忘及心故不覺螺絲節後離其  
 慮一言驚於畏國我未嘗也傳  
 親之智守不假器况纂帝業而  
 輕天位瞻望二祖麻庸孔棘常翹  
 以危懼若赤奔而無建白龍  
 魚眼見困豫且雖萬乘之無懼  
 猶休戒於一夫終日不離其輜  
 重獨微行其馮如夫君人有難  
 曠塞耳車中不內頭珮公制容  
 臺公節遂行不復王駕不亂失

128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139

不能屬東原之懿未聲價餘  
 有犬馬之疾不能究其詳故粗不  
 為賓言其標既如此若乃添道續  
 忘交心放不覺樂無節後離其會離  
 憾下言幾於衰國我未興王自與  
 批之智守不假器况纂帝業而繼  
 輕天位瞻望二祖廉庸孔謀常翔世  
 以双危懼若乘奔而無塵白龍  
 魚取見因鞅且雖萬一無之無懼特  
 善年保猶體裁於一夫終日不離其軸側  
 重獨微行其馬如夫君又者駐  
 續塞耳車中不內頤珮以制容

續塞耳車中不內頑珮頑珮制容  
 臺公節途行不變王駕不亂步  
 却走馬於藁車何惜驛裏飛  
 免方其用財取物常畏生類之  
 殛賦政任侵常畏人力盡取之  
 以道用之以時山無撓藪田不  
 腹胎道木繁廔鳥獸早滋人忘  
 其勞樂輸其財故百姓同於鏡  
 祈上下於其雍熙治愚素畜人  
 心固結執義願主夫懷真節志  
 奔扈之干命怨皇統之見贊玄  
 謀設而陰行合二九而成譎登  
 聖皇撥天階章漢祚之有秩若  
 此故王業可樂焉今吾子苟好

151 150 149 148 147 146 145 144 143 142 141 140

變遷

靈公鄙途行不寢玉如馬不亂步。

却走馬於囊車何惜鞭與飛。

免方其用財取物常畏生類之

亦賦任器常畏人力盡取之

又道用之必時山無椹藤田木

廢胎孽水繁泰應皇勳阜滋入息

其勞樂輸其財故百姓同於饒

行上下若其雍熙浩恩素畜水

心固結執義願主夫懷真節念義

女姁之于帝怨皇統之見贊女

謀設而陰行含二尤而成譖登

聖皇於天階尊明漢祚之有被若

162 161 160 159 158 157 156 155 154 153 152 151

皇恩之平命怨皇物之具積茲  
 謀設而陰行合二九而成謫登  
 聖皇於天階章漢祚之有祿若  
 此故王業可樂焉今吾子尚好  
 勦人以偷樂忘人怨之為仇好  
 彈物以窮寵忽下叛而生憂夫  
 水所以載舟之所以覆舟堅水  
 作於履霜尋木起於蘄藪昧且  
 丕顯後世循急况初制於甚恭  
 服者焉能改裁故相如壯上林  
 之觀揚雄駢羽獵之辭雖象以  
 價牆填塹亂以救其罍果卒無  
 補于風規祇以貽其冠尤臣濟  
 者以凌若忘經國之長基故





神未風規（神未風規）祇以昭具冠尤臣濟（昭具冠尤臣濟）  
 者以凌若忘經國之長基故（凌若忘經國之長基故）  
 函吞擊折於東西朝顛而莫持（函吞擊折於東西朝顛而莫持）  
 也凡人心是所學體女所習範（凡人心是所學體女所習範）  
 肆不知其臭勸其所先入咸池不（肆不知其臭勸其所先入咸池不）  
 齊度於擲咬而眾聽者惑疑能（齊度於擲咬而眾聽者惑疑能）  
 不惑者其唯子野乎客既醉未（不惑者其唯子野乎客既醉未）  
 道能於文誼勸德畏或喜懼交（道能於文誼勸德畏或喜懼交）  
 無惘然若醒朝罷夕棄氣禘（無惘然若醒朝罷夕棄氣禘）  
 之為者忘其所以為諉失其（之為者忘其所以為諉失其）  
 所以為卒良久乃言日斷哉（所以為卒良久乃言日斷哉）  
 金雀覆非而逐迷幸見指南於（金雀覆非而逐迷幸見指南於）  
 長乎若僕所聞華而不實先（長乎若僕所聞華而不實先）  
 出之言言而有敬歎夫直鐵奇（出之言言而有敬歎夫直鐵奇）

173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162

吾子若嫌所聞華而不實先

余斗蜀非而遂迷幸見指而於

所以為夸良文乃言目鄙哉

之為者忌其所以為談失其

爭慚然若駭朝思多秦氣

道鏡於文詞勸德畏欲喜懼矣

不惑者其唯子野乎客既醉於大

齊度於擢蹶而衆聽者惑疑能

肆不知其臆駭其所先入咸池不

也凡人心曷所寧字體安研習覽

函各擊拆於東西朝顛而莫持

審以凌君忘經國之長其基故

余嘗非而逐迷幸見拍南於  
 君子若葉平闡華而不實先  
 士之言信而有微鄙夫宣識而  
 今而後乃知大漢之德馨感在於  
 此首常恨三墳五曲既汲仰不  
 瞻炎帝之魁之美得聞先生之  
 餘論則大庭氏何以尚茲豈雖不  
 敏庶斯達矣  
 南都賦一首 張平子  
 於頭樂都既麗且康陪京之南  
 居漢之陽割周楚之豐壤碎  
 荆豫而為壇體奕控開敬躬  
 其難詳余其地勢則武關開  
 具西桐攬得東流滄浪而為

陽  
注

185 184 183 182 181 180 179 178 177 176 175 174

勝北日  
華惠

注四

生之言信而有徵鄙夫宣識而于身  
 今兩俊乃知大漢之德馨執不於於  
 此昔常恨三墳五曲既遠長仰不  
 瞻炎帝之魁蓋之美得聞先生之  
 餘論則大庭氏何以尚茲于芝雖不  
 敏庶斯達矣于矣  
 南都賦一首 張平子  
 於顯樂都既煙且康陰京之南  
 居漢之陽于宮周楚之豐壤于隆  
 荆豫而為壘體奕豐明也散也郁也  
 其西桐栢檀其東流滄浪而為其

兼務而為擗體夾撐開敵絞郁  
 且難許余具地勢則武關開  
 具西桐栢得耳東流滄浪而為  
 隍廓方城以為孀湯谷涌其後  
 青水邊其勾推淮引端三方豈  
 通具寶利玳瑁則金采玉璫隨  
 珠夜光銅錫鉛錯楛望流黃  
 緣碧紫菜青攢丹粟太一餘糧  
 中黃叢王松子神散赤靈解角  
 赫文揚光於清冷之剡遊女弄  
 珠於漢擘之曲其山則崆峒嶂  
 鳴嘯些嶽刺峭嶺崇崖鬼獻  
 吃嚙幽谷嚼岑夏含霜雪或  
 岩嵯而纏駮或豁尔而中絕藹  
 冠之且急天府元規平靈虎



吃煙逃谷嶮岑夏含霜雪或  
 岩嶭而鑿巖或豁尔而中宛鞠  
 鏡其隱天俯而觀平雲霓  
 若夫天封大狐列仙之陳上平  
 所而曠蕩下嶮籠而崎嶇坂塹  
 巖岸而成巖窞鑿錯衆而巖紆  
 之房菌叢生其隈玉膏密溢  
 流其隅恨偷無以侈閑風弗能  
 踰其木則樞松擗搜擗栢扭檀  
 楓柙櫛櫛帝女之素捐欄旃欄  
 挾柘檀榷結根棘本舌絳煙煖  
 布綠華之華敷葦葉之蕪  
 玄靈舍而重墜谷風起而增  
 東橫芝蕞駢青真羊曠本自謂





布疎葉之華（方九）、敷華葉之衰（春茂）  
 玄雲含而重陰谷風起而增（九）  
 衰橫之繁駢青實半填香（大石）香謂（六）  
 梢鬱森蓊（七）而刺天席豹黃（七）  
 態遊其下毅攬傑徒戲具巖（七）  
 豪鳥嶽鸞鸞翔其上瞻後飛獨（七）  
 俦且聞其竹則鍾龍並豈好徐（七）  
 斡莽緣桁坳潭漫陸離阿（七）  
 邠背昔風廉雲披介具川瀆則（七）  
 洩灑灑盡茂源巖穴潛蓋洞（七）  
 出沒淫濫滴有滂滂汗淋漓（七）  
 溢溢括趣欲削馳風疾流湍欲（七）  
 灑灑八朝軋長輸遠逝浪屢滅（七）  
 洞其水懸則有鸞鸞鳴地潛（七）



230 229 228 227 226 225 224 223 222 221 220 219

為陸大橋夏禱隨時代孰其  
 專勿道流獨兼汝泄則曠為流  
 其水則有開竇瀝流浸彼稻  
 鵝鵝鳴鵝鳴（和鳴澹淡隨波）  
 鴛鴦鴛鴦鴛鴦鴛鴦鴛鴦  
 從風菽菜葉披芬乾具鳥則有  
 舖蓋坡漆亦麥炭尖岩蓮華  
 望無崖其草則有蘆芋葵芒蔣  
 澤則有鉗盧玉池貯水停汗巨  
 龍伏鱗鱗鱗鱗鱗鱗鱗鱗  
 汨與水蟲則有鷺鳥龜鳥蚶落  
 濃欲八朝軋長輸速迹潔凌瀧  
 溢疑花菱台蒲馬居疾亦福合



242 241 240 239 238 237 236 235 234 233 232 231

興西漢滌獨秦汝泄則曠為漑（注）  
 為陸冬稼夏穡隨時不熟其（注）  
 原野則有素沫漉銜麥種（注）  
 菜百穀蕃蓋翼之興之若其（注）  
 園圃則有藜藿藜荷諸蔬（注）  
 豈藩穉苜蓿乃有櫻梅山（注）  
 插換桃李梨栗栲葉若插穰橙欖（注）  
 橘其香草則有薜荔葛若薇（注）  
 並蓀莖長暎嬾翳蔚舍奇味芬（注）  
 若其廚膳則有華鄉重稻灌拳（注）  
 香批歸鷹鳴鴉黃稻鱸奠以（注）  
 為艾藥醱眩滋味百種千名春（注）  
 介夏荀秋韭（注）首換裝禁薑（注）  
 拂徹糧醒酒則九醞甘醴十旬（注）

242 241 240 239 238 237 236 235 234 233 232 231

百考菓  
軍三惠

為陸冬採夏繼隨時汁熟其

原野則有萊沫鱗鱗芬苒麥稷

采百穀菑蕪翼之與之若其

園圃則有藟藟藟藟藟藟藟藟

薑譜拈實字似乃有櫻梅山

檉檉檉檉檉檉檉檉檉檉檉檉

橘其香草則有薜荔藟藟藟藟

蕪蓀出長暗暖含芳吐芳

若其厨膳則有莘重極滋筆

香批躡鷹鳴瓊黃稻鱸與以

為不藥酸一味百種千名春

卯夏筍秋悲菁揮散紫薑

254

253

252

251

250

249

248

247

246

245

244

243

个夏荀秋非<sub>之</sub>青樓裝紫蓋  
 拂徹醴醒酒則九醞甘醴十旬  
 無清醪敬佳寸流<sub>之</sub>若萍其  
 酬不奕醉而不醒及其<sub>之</sub>宗綏  
 旋約<sub>之</sub>送膏以速<sub>之</sub>遠朋嘉賓  
 是將捐讓而昇寧干蘭室珠  
 考琅玕充溢圖方<sub>之</sub>厥<sub>之</sub>瑤<sub>之</sub>押<sub>之</sub>捲<sub>之</sub>金  
 銀珠琳侍者盡<sub>之</sub>媚<sub>之</sub>中<sub>之</sub>辨<sub>之</sub>辨<sub>之</sub>明  
 被服雜錯履躡華英保才<sub>之</sub>齋  
 敬受爵傳<sub>之</sub>聽<sub>之</sub>敵<sub>之</sub>嘲<sub>之</sub>既<sub>之</sub>交<sub>之</sub>師<sub>之</sub>禮<sub>之</sub>无  
 連<sub>之</sub>彈<sub>之</sub>琴<sub>之</sub>撒<sub>之</sub>菴<sub>之</sub>流<sub>之</sub>風<sub>之</sub>能<sub>之</sub>個<sub>之</sub>清<sub>之</sub>角  
 羨<sub>之</sub>散<sub>之</sub>聽<sub>之</sub>者<sub>之</sub>增<sub>之</sub>哀<sub>之</sub>容<sub>之</sub>賦<sub>之</sub>解<sub>之</sub>言<sub>之</sub>歸  
 玉<sub>之</sub>舞<sub>之</sub>露<sub>之</sub>未<sub>之</sub>晞<sub>之</sub>接<sub>之</sub>歡<sub>之</sub>豈<sub>之</sub>於<sub>之</sub>日<sub>之</sub>夜  
 之儀於是暮春之

254  
253  
252  
251  
250  
249  
248  
247  
246  
245  
244  
243

玉稱露未晞晞接 歡燕於日夜

菱鏡聽者增哀增哀客賦客賦駢言歸駢言歸

擲擲彈彈連連彈彈琴琴撒撒流流淪淪風風能能個個清清角角

敬敬受受爵爵賜賜獻獻朝朝既既文文師師禮禮元元

假假髮髮被被服服雜雜鋪鋪履履躡躡華華英英傑傑才才齊齊

銀琳銀琳那那侍侍者者靈靈姬姬巾巾帷帷解解明明

圓 著著琅琅牙牙充充溢溢圖圖方方厭厭瑋瑋押押掩掩金金

長長持持擘擘讓讓而而昇昇宴宴于于蘭蘭堂堂珠珠

棧棧初初荷荷送送嘗嘗以以速速明明嘉嘉賓賓

酬酬不不爽爽酬酬而而不不醒醒及及其其宗宗縱縱

無無清清醪醪敬敬淫淫物物浮浮以以鐵鐵若若淨淨其其

拂拂微微擅擅腥腥潤潤則則九九醞醞甘甘醴醴十十旬旬



259 258 257 256 255 254



259 258 257 256 255 254

主攝露未晞接歡燕於日夜

終凱樂之冷儻於晨暮春之

禱元邑之辰方輒齋斬後于

陽濱未推連經曜野映雲男

女妓眼路驛續少致飾程遊野

子云 腰經便娟微眺流睨緜眉連捲

(以上管見記卷百五卷紙背)

271 270 269 268 267 266 265 264 263 262 261 260

於是商僅管乃不其女生言那  
 兮起歌舞與鸞飛兮蘭泉者  
 袖袖察繞而滿庭羅綺  
 而容與翩翩其若絕姬將墜  
 而復舉翹遠逐歌聲舞  
 九秋之增傷怨西京之折葉  
 琴箏吹笙更為新聲哀歸悲  
 吟鷓鴣哀鳴坐者博秋傷魂  
 傷精於足群士故逐馳於沙  
 塲驟驟齊鑿黃間機張之逆  
 奮飛鏖行毫芒俯之貫躬  
 仲落雙鶴與不及窺鳥不暇  
 翔介乃撫輕舟兮浮清池亂北



仰落雙鷁與不及窺鳥不  
 翔介乃輕舟兮浮清池亂  
 者兮揭南崖丈室講者聊  
 陽侯洗兮掩鳥驚是水滌  
 翔翮單屐龍兮拂妓舞是  
 既走昏樂者未甚坑駢今  
 背迴塘車雷震而風厲馬  
 而龍驤多暮宵駢其樂難  
 遶觀之好牙目之娛未觀  
 也烏之稱譽夫南陽者真  
 漢之舊都者也遠世則劉  
 康龍監觀魯縣而來遯秦  
 河追孝立唐祠牙充山固  
 於夏葉終三代而始蓄非

283 282 281 280 279 278 277 276 275 274 273 272

卷八

翔余乃極舟兮浮清池亂北  
 渚兮揭南崖協音上九灑灑兮松客寓音九  
 陽侯送兮掩鳥鷺音九追水豹兮  
 蜩蟪憚憂龍兮梯披螭於具白  
 既遠旨樂者未忘故羅兮加兮  
 背迴塘車雷震而風厲馬蹶趨  
 而龍驤夕暮而歸其樂難忘斯乃  
 遊觀之好耳目之娛未覩其美者  
 也焉受梅梁堂太南陽者真所謂  
 漢之舊都者也遠世則劉表居  
 康寵監視魯縣而來遷奉先帝  
 而退考立唐祠于荒山固靈糧

西追孝立唐祠于堯山固靈根  
 於夏葉終三代而始蕃非純德  
 之宏圖孰能發而奮薄道則并  
 饑思故匪屑垂寧本長入之  
 元樂應江湘而北迴曜春光於  
 白水會九世而飛茶案茲都之  
 和銀天也百雀壺才翼日  
 室則有園廬舊意隆崇本  
 翔房禮以華廩陳閣燬其相蔽  
 聖皇之所適逢靈祐本降降章  
 陟壽以青益清唐爾本皇  
 祖歆而降福孫萬祀而無衰帝  
 王威具檀美本南音以頌本襄  
 且其君子弘懿明哲允本登良

295 294 293 292 291 290 289 288 287 286 285 284

於夏禹終三代而始蕃非德  
 之宏圖孰能揆而慶海近則考  
 侯思故亟居速寧長嶽之  
 元樂。應江湘而北巡。曜朱光於  
 白水。會九世而飛。崇密茲都之  
 神偉。啓天心而寤靈於是宮  
 室則有園廡。層宇隆崇。心  
 鄉房。總以華麗。連閣燿其相儼。美也  
 聖皇之所逍遙。靈祇之所保登。章  
 陵。懿以青志。清廣。肅以敬皇。  
 祖歌而降福。禘萬祀而無衰。帝  
 王感其禮。美詠南音以頌。壇



307 306 305 304 303 302 301 300 299 298 297 296

王威威具具檀美美詠詠南音南音以以頌頌懷懷  
 且其君子私私懿懿明明極極允允於於憂憂良良  
 欲止可則出言有有講講進進退退屈屈  
 申申與與時時抑抑揚揚方方今今天天地地之之靡靡刺刺  
 帝帝亂亂其其政政待待復復肆肆虐虐真真革革今今  
 之之教教也也爾爾具具則則有有謀謀臣臣武武將將擢擢  
 慶慶執執極極破破堅堅摧摧對對排排捷捷躡躡不不  
 暨暨踰踰咸咸陽陽高高祖祖時時其其塗塗築築尤尤  
 武武攬攬其其英英思思公公開開門門又又距距漢漢德德  
 遠遠周周跡跡之之疇疇據據斷斷足足焉焉先先王王  
 轍轍循循紳紳之之倫倫經經論論亂亂典典賦賦納納人人言言  
 也也公公朝朝無無闕闕故故風風烈烈昭昭宣宣於於是是  
 乎乎見見過過肩肩毒毒躬躬背背之之史史籒籒之之然然

307  
306  
305  
304  
303  
302  
301  
300  
299  
298  
297  
296

且其君子弘懿明哲允恭溫良

發止可則出言有章進退屈

申與時<sup>聖</sup>相<sup>聖</sup>協<sup>聖</sup>方今天地<sup>應</sup>之<sup>聖</sup>惟<sup>聖</sup>維<sup>聖</sup>也

帝亂其政材狼肆虐真之革伸

之秋也<sup>聖</sup>爾真則有謀臣武將擢字

宸執<sup>聖</sup>猛<sup>聖</sup>破<sup>聖</sup>堅<sup>聖</sup>摧<sup>聖</sup>踞<sup>聖</sup>對<sup>聖</sup>排<sup>聖</sup>捷<sup>聖</sup>陷<sup>聖</sup>陷<sup>聖</sup>

靈<sup>聖</sup>踰<sup>聖</sup>咸<sup>聖</sup>陽<sup>聖</sup>高<sup>聖</sup>祖<sup>聖</sup>階<sup>聖</sup>其<sup>聖</sup>塗<sup>聖</sup>其<sup>聖</sup>光<sup>聖</sup> 除<sup>聖</sup>阿

式攬其美是以開明又踞漢德

久長也及其去危乘安視良用

遼周跡之曠據斷足為以佐王

轍<sup>聖</sup>縉<sup>聖</sup>紳<sup>聖</sup>之<sup>聖</sup>倫<sup>聖</sup>經<sup>聖</sup>論<sup>聖</sup>訓<sup>聖</sup>典<sup>聖</sup>賦<sup>聖</sup>納<sup>聖</sup>公<sup>聖</sup>言<sup>聖</sup>

是以朝無闕政風烈明宣於是

卷五

319 318 317 316 315 314 313 312 311 310 309 308

志朝無聞既風刃昭宣於皇  
 平兒邁肩毒船背之曉鑄然  
 被誇談者喟然相與歌曰聖翠  
 華子儀蓬蓬大帝兮排  
 龍兮駭振錄鸞兮京師  
 萬葉兮能個按奔路兮來歸  
 豈不思天子南巡之辭有哉  
 遂作頌曰皇祖止焉光武之  
 為懷彼河洛統四海兮平枝  
 百世位天子焉永世克恭陳采  
 輝焉真人南巡觀舊里焉  
 三獻賦序 左天冲  
 目詩人之賦麗公則狂國目舉者

308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319

第五卷

平平自自齒齒肩肩負負壽壽輿輿背背之之嬰嬰鰭鰭之之然然焉焉  
世兼曹無才  
被被黃黃駭駭者者唱唱嬖嬖相相與與歌歌目目望望翠翠！  
中兒化  
萃萃兮兮遊遊楚楚遠遠太太常常兮兮疎疎野野馳馳驅驅！  
若無  
龍龍兮兮擊擊心心振振鉢鉢驚驚兮兮京京師師檢檢！  
皇義  
萬萬葉葉兮兮非非細細按按平平路路兮兮來來歸歸！  
女從  
豈豈不不思思天天子子南南巡巡之之僻僻者者哉哉！  
中  
遂遂作作頌頌目目皇皇祖祖止止焉焉光光武武起起！  
中  
焉焉據據彼彼河河洛洛統統四四海海焉焉本本枝枝！  
中  
百百世世恆恆禾禾子子焉焉永永世世克克懷懷柔柔！  
中  
梓梓焉焉真真人人南南巡巡胡胡蕭蕭里里焉焉  
不曹家作非  
二二都都賦賦序序 左左太太冲冲  
蓋蓋詩詩有有六六義義焉焉其其二二曰曰賦賦揚揚雄雄

331 330 329 328 327 326 325 324 323 322 321 320

日詩人之賦六朝與班固曰賦者  
 古詩之流也先王采焉以觀土  
 風見翠竹則知衛也淇澳之  
 產見在其厥屋則知秦野西戎之  
 宅故能居遠而辨八方炊相如賦  
 山亦而引盧孫是身材左賦甘泉  
 而陳玉樹青翠斑固賦西都而數  
 出此目張衡賦西京而述以蓬瀛者  
 綴稱瓊瑤為潤色若斯之類  
 匪言于茲考之草木則非其  
 爍校之神物則出非其所采詞  
 則易為漆銘於義則虛而無  
 徵且夫王虎無牆雖實非用後

331 330 329 328 327 326 325 324 323 322 321 320

曰詩人之賦梁靈公則班固目賦者

古詩之流也先王采焉以觀乎

風見練竹漪然則知衛地淇澳之

崖見在其傾屋則知秦野西戎之

宅故能居然而辨八方然相如賦

上林而引虞橘夏襲揚雄賦甘泉

槐也而陳至樹青葱班固賦西都而繁以

出北自夜衝賦西京而述以遊滄若

根緝環以為潤色若斯之類

匪宮于滋孝芝菓木則生非其

壤授之神物則也非其所吟詞

則易為藻飭於義則虛而興

343 342 341 340 339 338 337 336 335 334 333 332

則易為漆飴於義則虛而無  
其微且夫玉色無疆雖寶非用彼  
其言與駭雖非經而論者莫不  
其詠詩其精作者大旨樂為憲  
其積習生常有自來矣余既  
其思攀二京而賦三都其山川城  
其邑則晉之池圖其鳥獸草木則  
其驗之方志風謠歌舞各附其俗  
其鬼梧長者莫非其舊何則發  
其言為詩者詠其所志也外高  
其能魁者頌其所見也養物者  
其貴依其本贊亭者宜准其實非  
其非實覽者奚信且夫任生作百  
其所者辨物居方周易所謂聊

第二卷

- 343 非實非實覽者，奚信且夫任生在實作在實實書
- 342 貴依其本毛贊事者宜准其實非本
- 341 能賦者頌其所見也。美物者
- 340 言為詩者，詠其所志也。外高
- 339 魁梧長者，莫振其舊。何則何則發之
- 338 驗之方志風謠，歌舞各附其俗
- 337 邑則智之地圖，其鳥獸草木則
- 336 思慕之京而賦二都，其山川城
- 335 章積習，生常有自來矣。余既
- 334 言詩其研精，作者大言為為憲
- 333 言無驗，雖非經而論者莫不
- 332 微且夫玉色無雖非用俊



355 354 353 352 351 350 349 348 347 346 345 344

覽者，非實矣信且夫任土作育，作育業書  
 所者，辨物居之居易，填鄒填鄒  
 舉其一隅，具體具體統歸諸詁訓  
 焉  
 蜀都賦一首 左太冲  
 有西蜀公子者言於東吳王孫  
 曰蓋聞天以日月為經地以四海  
 為紀九土星分萬國錯峙嶠岵  
 有帝皇之定河洛為王者之里  
 吾子豈立曾聞蜀都之事歟請  
 為左右揚權而陳之夫蜀都者  
 蓋壯壑於上開國於開國於上古來  
 壘開而為門壘開而為門  
 三江之雙壘開而為門壘開而為門  
 壘開而為門壘開而為門壘開而為門

355  
354  
353  
352  
351  
350  
349  
348  
347  
346  
345  
344

雲開而為月為月已玉璽而為字帶  
蓋姓基於上世開國於中古意  
為左右揚權而疎之夫蜀都者  
吾子豈之然曾聞蜀都之事歟請  
有帝皇之密河洛為王者之里  
為紀九玉皇分萬國錯蹄非喙非以  
自蓋聞天以日月為細地以四海  
有西蜀公子者言於東吳王孫  
蜀都賦一首 左太冲  
寫  
擊其一禍擯其輿統歸諸詔訓  
所嗜擊物居方周易西填鄂

367 366 365 364 363 362 361 360 359 358 357 356

靈開而為（下略）  
 二江之雙（下略）  
 陸所湊並六合而交會為豐蔚  
 所感茂八區而菴謂為於前則  
 揆躡捷祥枕（下略）轉交趾經塗研亘  
 五十餘里山阜相屬發穀棟谷  
 崗巒多纒觸石吐雲鬱於蓋豈以  
 翠嶽虛巍（下略）我々于清霄而  
 奔出舒丹氣而為靈疑龍池（下略）瀑  
 竇其隈漏江伏流潰具阿（下略）  
 陽谷之楊濤沛若滂沱之灑（下略）  
 於是乎平竹綉嶺蘭桂臨崖雲  
 披龍目側生披披而繁葉之叢  
 以結未實之離（下略）定隆冬而不歇

367 366 365 364 363 362 361 360 359 358 357 356

筆一裏

二江之雙流抗眉之重阻水

陸所湊鐵六合而交會為豐斯爾

所感戎八區而壘壘焉於前則

跨躡捷捷十樣地轉卸交趾經塗所巨

五千餘里山阜相屬含谿摶谷

崗巒亂外觸石吐雲燦燦益盡以

翠嶽巖巍以故我之于青霄而

卷出舒丹氣而為霞龍池瀉瀑

續其隈漏江依流潰其阿澗若

湯谷之揚濤滄岩濠紀之涌波

於是乎玕竹緣山嶺劍桂臨崖旁

持寵自側生劫上之布綠莖葉之華

379

378

377

376

375

374

373

372

371

370

369

368

梳龍目側生披艾布綠葉之華  
 結朱實之離離迎降兮而不融  
 常幕翠倚孔翠群翔厚象  
 競馳白雉朝雄雄夜啼金馬  
 馳光而絕歇碧鴛鴛忽而耀儀  
 夫鸞其間則有帝嚳丹青江珠  
 裝其金汝銀礪符彩彩輝靈  
 灼鑠於後則却背華容北極豐  
 會緣以劍閣阻以石門流漢湯  
 驚民雷奔聖之天圍即之雲  
 屬木物珠品麟亦異樣或藏蛟  
 精或連碧玉嘉魚出於丙穴良  
 木積於棗谷其樹則有木蘭授

379 378 377 376 375 374 373 372 371 370 369 368

(筆墨)

玉結朱實之離玉結迎降冬而不敗  
 常暉暉高高倚倚翠群翠群翔犀象  
 竟馳竟白雉白雉朝雛朝雛猩猩夜啼夜啼金馬  
 馳光馳而絕而絕駭駭碧碧鷄鷄盤盤忽忽而曜而曜儼  
 火井火井沉沉撥撥於於鵝鵝泉泉高高爛爛飛飛燭燭木木  
 禾禾嵩嵩其其間間則則有有鼎鼎螭螭丹丹青青江江珠  
 振振英英金金沙沙銀銀礫礫行行彩彩飛飛炳炳耀耀麗  
 灼灼鑠鑠於於後後則則却却背背萃萃客客北北指指崑  
 崑崑歌歌劍劍閣閣阻阻於於石石門門流流溪溪湯湯  
 驚驚第第浪浪雷雷奔奔望望之之天天田田阡阡之之雲  
 昏昏水水物物殊殊品品鱗鱗介介異異揆揆或或藏藏蛟  
 擗擗或或隱隱瑞瑞五五嘉嘉魚魚出出於於丙丙穴穴良

391 390 389 388 387 386 385 384 383 382 381 380

木植於哀谷其樹則有木蘭授  
 挂祀構相振榘榘榘榘榘榘  
 謔於谷底松栢蒨蔚於山峯  
 偷奔說長緜廟飛盡特輕霄  
 和假遺於峻岫陽焉翅翼半高探  
 巢營極朝奉靈獸林穴宅奇歎  
 寢宿異禽熊雁吃其陽鷗鷗鷗  
 晴而乘冷於東則左帶巴中百  
 所枕外負銅梁客渠幽函要富  
 膏腴其中則有巴外巴城雲毒  
 推校樊以蘊圍澗公盪池嫩煉  
 山徑龜龜水泉清龍塔於沮澤  
 鷹鳥鼓而興兩舟沙荒巖出其





392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403

山埤龜龜水虜潛龍蟠於沮澤  
 鷹鳴鼓而興而丹沙范城出耳  
 陔壑房鬱毓被具阜山圖採而  
 得道亦奔服而不朽若乃野行入  
 並具方風譎尚具武奮之則實  
 珠玑之則諭異鏡氣飄中業  
 瑞雲世於鸞府於西則石挾昏  
 山涌清發川臨以復素歌成  
 車調御草昧木槎影覆空讓  
 齊盤踞鴛鴦伏百樂雜廉寒  
 午冬霞星真辰夕行六上  
 丰則有青珠寶珠瑤笈並消滅  
 豐琛業或着斗斜廉並柳液  
 在中阿風連進善於蘭華經



豊緑蒙或着丹楨麤並布漚  
 在中阿風運進漸於蘭筆筆  
 然飾柯葉斬芭鼓蕙蕙差若  
 莫飄飄神農是膏俞俞具具封城之內  
 追氣窮朱鑄厲痛具封城之內  
 別有原阻填銜銜聖孫博演演以  
 潛沫漫漫公綿雖溝沍眇散散疆理理  
 錡錯錯乘乘被被由由種稻種漬漬柏渠渠  
 以為雲門灑灑池而為陸澤雖  
 星畢之滂池尚有未膏其膏液  
 介乃邑居居鷹鷹夫江倚山棟宇  
 相望素構構更家有楹泉之

保成

未善

415  
414  
413  
412  
411  
410  
409  
408  
407  
406  
405  
404

懷慶也  
縣名也

相望來梓樓不<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>梓<sub>レ</sub>樓連家不<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>連<sub>レ</sub>家有塩泉之

尔乃邑居隱巖夾江傍山棟宇別<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>巖<sub>レ</sub>傍<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>棟<sub>レ</sub>宇<sub>レ</sub>

星畢之滂池昔<sub>レ</sub>畢<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>滂<sub>レ</sub>池尚有未齋其膏液未<sub>レ</sub>齋<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>膏<sub>レ</sub>液

以為雲門以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>雲<sub>レ</sub>門瀼瀼池瀼<sub>レ</sub>瀼<sub>レ</sub>池而為陸澤而<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>陸<sub>レ</sub>澤雖

鑄錯來搜油鑄<sub>レ</sub>錯<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>搜<sub>レ</sub>油綆綆<sub>レ</sub>綆綆<sub>レ</sub>漢漢<sub>レ</sub>指渠指<sub>レ</sub>渠

沫沫<sub>レ</sub>潛沫潛<sub>レ</sub>沫浸浸<sub>レ</sub>綿綿<sub>レ</sub>維維<sub>レ</sub>溝溝<sub>レ</sub>瀼瀼<sub>レ</sub>脈脈<sub>レ</sub>散散<sub>レ</sub>疆疆<sub>レ</sub>理理<sub>レ</sub>

則有原隰則<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>原<sub>レ</sub>隰填填<sub>レ</sub>行行<sub>レ</sub>角角<sub>レ</sub>空空<sub>レ</sub>孫孫<sub>レ</sub>博博<sub>レ</sub>濱濱<sub>レ</sub>以

退氣耶退<sub>レ</sub>氣<sub>レ</sub>耶味味<sub>レ</sub>錫錫<sub>レ</sub>厲厲<sub>レ</sub>痛痛<sub>レ</sub>其封城之內其<sub>レ</sub>封<sub>レ</sub>城<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>內

英飄英<sub>レ</sub>飄颯颯<sub>レ</sub>神農神<sub>レ</sub>農是嘗是<sub>レ</sub>嘗命命<sub>レ</sub>附附<sub>レ</sub>且且<sub>レ</sub>料料<sub>レ</sub>芳芳<sub>レ</sub>

紫銅紫<sub>レ</sub>銅柯柯<sub>レ</sub>葉葉<sub>レ</sub>斬斬<sub>レ</sub>訖訖<sub>レ</sub>敷敷<sub>レ</sub>蕙蕙<sub>レ</sub>蕪蕪<sub>レ</sub>越越<sub>レ</sub>落落<sub>レ</sub>

扶中阿扶<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>阿風連風<sub>レ</sub>連迹迹<sub>レ</sub>憂憂<sub>レ</sub>於於<sub>レ</sub>蘭蘭<sub>レ</sub>軍軍<sub>レ</sub>紅紅<sub>レ</sub>絕絕<sub>レ</sub>

豐綵豐<sub>レ</sub>綵歲歲<sub>レ</sub>或或<sub>レ</sub>蕃蕃<sub>レ</sub>丹丹<sub>レ</sub>林林<sub>レ</sub>藤藤<sub>レ</sub>蘆蘆<sub>レ</sub>布布<sub>レ</sub>濱濱<sub>レ</sub>

429

428

427

426

425

424

423

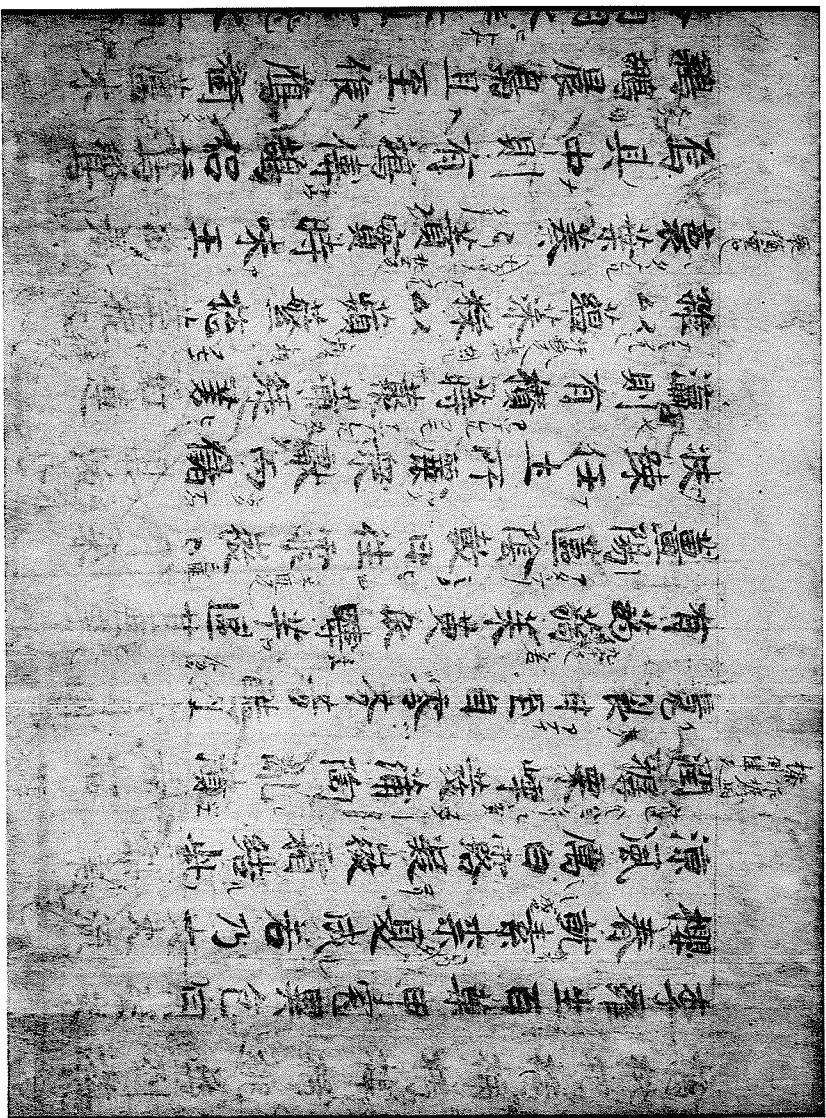
422

421

420

419

418



427 426 425 424 423 422 421 420 419 418 417 416

井穴有橘柚之園則有林

橋枕把橙栲攴掃桃為列梅

李羅生百巢甲窠異乞筒漿朱

櫻春就素崇夏成若乃大流

涼風屬白露凝敬霜結

秦作塢園 澗握栗嶸表蒲陶亂漬若榴 鐸

鏡裂甘至首零芬芳酷烈其圃則

有吻蕊菜莢瓜躑芋區甘糜草

薑陽盧陰故日往來

扶疎任生所麗眾敵而儲其瀉

瀛則有橫時蒙蒲萊菱紅蓮

雅以鹽菜糝以類莖揜基泥

第五選

439

438

437

436

435

434

433

432

431

430

爲具中則有鴻傳鳩招持得餐  
 鸚鵡展鳥且至候鷹衝  
 落南綯水洋北似雲飛水一角平  
 元清潭具深則有白龜人  
 玄嶺生茶釀籜籜籜籜籜籜籜籜  
 舞老歛次包錦質鞞鞞鞞鞞鞞  
 敵瀕中添拍馬於是平今  
 郭垂而中區既履且崇  
 成林闢二元之通門畫立  
 廣運會善言才多堪堪末  
 起廬結陽城之連閣飛觀  
 雲中開高軒必臨山列崎  
 江內則識殿舞臺其義  
 已之圖矣

第六卷

- 428 龜獨龜龜豪豪葉葉秦秦行行黃黃實實時時味味王王公公羞羞
- 429 雉雉其其中中則則有有鴻鴻傳傳鴻鴻侶侶振振鷺鷺鷺鷺
- 430 鷓鴣鷓鴣晨晨鳥鳥且且至至候候中中鷹鷹銜銜蘆蘆木木
- 431 落落南南翔翔水水泮泮北北復復雲雲飛飛水水宿宿暉暉
- 432 吮吮清清涼涼其其深深則則有有白白雲雲飄飄令令整整麗麗
- 433 玄玄纁纁上上茶茶饒饒鑄鑄助助鑄鑄鑿鑿豐豐劍劍
- 434 鱗鱗老老鱗鱗次次包包錦錦質質執執章章羅羅漢漢
- 435 賦賦瀨瀨中中流流相相息息於於是是半半金金城城石石
- 436 郭郭錐錐而而中中區區既既麗麗且且崇崇實實繁繁
- 437 成成都都闢闢二二九九之之通通門門畫畫方方軌軌之之
- 438 廣廣塗塗營營新新宮宮於於爽爽壇壇擬擬采采明明而而
- 439 起起廬廬結結陽陽城城之之連連閣閣飛飛亂亂樹樹平平



451 450 449 448 447 446 445 444 443 442 441 440

雲中開高軒必臨山列嶺雲中開高軒必臨山列嶺

江內則嚴殿爵臺於義席江內則嚴殿爵臺於義席

化之閭崇祀之闈華開雙化之閭崇祀之闈華開雙

門洞開金鋪之映玉題相門洞開金鋪之映玉題相

輒獨八達里開對出此屋連輒獨八達里開對出此屋連

廬方室亦有甲第當衢向廬方室亦有甲第當衢向

宇頭敞高門駢馬迹和鍾聲童宇頭敞高門駢馬迹和鍾聲童

撫琴瑟應揚垂簾專能是撫琴瑟應揚垂簾專能是

少城接平具西市塵平會少城接平具西市塵平會

送列隨爾重羅謀臣平賭送列隨爾重羅謀臣平賭

積織麗星繁有人士女培積織麗星繁有人士女培

賈貨端簪簪行縱橫異物賈貨端簪簪行縱橫異物

詭奇於八方布有種莖詭奇於八方布有種莖

梳根不女傳說於木良梳根不女傳說於木良



463

462

461

460

459

458

457

456

455

454

453

452

詭奇於八方有種並懸有  
 梳檉取杖傳語於火氣  
 首流味於番馬之鄉與葺籍始  
 冠帶混并疊敷疊跡於行相頭  
 謹謹斷涕則唯臨宇由寢營張  
 天則埃燼曜靈闌闌之裏仗巧  
 之家百室誰怨機杼相和自錦  
 斐成濯色泛皮黃閭比筒翫金  
 戶邊俊俊橙橙富卓富卓餘餘塔塔名名公公檀檀山  
 川貨貨值值松松庭庭蕭蕭鑑鑑刀刀鉞鉞柳柳  
 鉤鉤祖祖之之財財雄雄翁翁碧碧皇皇城城三三蜀蜀  
 之之豪豪時時來來時時往往卷卷末末茶茶已已嘗嘗傳傳  
 附附臺臺劇劇戲戲論論梳梳檉檉抵抵掌掌出出身身  
 連連騎騎歸歸從從百百內內若若具具舊舊俗俗非非矣矣

463 462 461 460 459 458 457 456 455 454 453 452

セウ  
セウ

第十卷

嘉トシ記キ奇キ於コ八ハチ方ハチ布フ有アル撞ツク拳ケン麵メン有アル

杖シヤウ取キ枝シ傳デン節セツ於コ大ダイ夏ゲツ之ノ邑イ均クン

驚キョウ流リウ味ミ於コ菴アン鼎テイ之ノ鄉キョウ興キョウ華カ雜ザ沓カ

符フ盈エイ冠クワン塔トク混コン汗カン思シ輦フン買バイ邱キウ披ヒ行コウ相コウ傾キョウ

諠セン譁ワ斷ダン涕テイ則ソク跪クワイ寧ネイ宙チウ啣ケン麼マ張チヤウ

天テン則ソク埃アイ嗒タク躍ダク靈レイ闐テン闐テン之ノ裏リ伎キ巧キョウ

之ノ家カ百ヒャク室シツ離リ房フウ機キ持チ相コウ和ワ且チ錦キン

雙シュウ成テイ濯タク色シキ江カウ波ハ黃ワウ閨クワン比ヒ笥シ富フ龜クワン

可カ過カ保ホ隆リウ富フ阜フ鄒ソウ均クン一イツ名メイ松ソウ檀タン山サン

川セン貨カ殖シツ松ソウ庭テイ鐵テツ鑪ロ鈿ケン方フウ銀イン柳リウ

無ム程テイ之ノ以コト財サイ雄ユウ輸コ買バイ邊ペン城テイ三サン蜀シツ

之ノ豪コウ時テイ來ライ時テイ往テイ養ヤウ支シ都ト邑イ結ケツ傳デン

475 474 473 472 471 470 469 468 467 466 465 464

三  
 垂<sub>皇</sub>冠<sub>皇</sub>匪<sub>皇</sub>句<sub>皇</sub> 籠<sub>皇</sub> 法<sub>皇</sub> 境<sub>皇</sub> 寒<sub>皇</sub> 廉<sub>皇</sub>  
 西<sub>皇</sub> 踰<sub>皇</sub> 金<sub>皇</sub> 恩<sub>皇</sub> 東<sub>皇</sub> 越<sub>皇</sub> 玉<sub>皇</sub> 津<sub>皇</sub> 羽<sub>皇</sub> 別<sub>皇</sub> 聊<sub>皇</sub> 旣<sub>皇</sub>  
 俱<sub>皇</sub> 眼<sub>皇</sub> 由<sub>皇</sub> 文<sub>皇</sub> 玄<sub>皇</sub> 黃<sub>皇</sub> 異<sub>皇</sub> 挽<sub>皇</sub> 結<sub>皇</sub> 駟<sub>皇</sub> 寶<sub>皇</sub> 髮<sub>皇</sub> 簪<sub>皇</sub>  
 倫<sub>皇</sub> 從<sub>皇</sub> 禽<sub>皇</sub> 不<sub>皇</sub> 外<sub>皇</sub> 卷<sub>皇</sub> 無<sub>皇</sub> 居<sub>皇</sub> 人<sub>皇</sub> 並<sub>皇</sub> 乘<sub>皇</sub> 驥<sub>皇</sub> 子<sub>皇</sub>  
 醉<sub>皇</sub> 累<sub>皇</sub> 月<sub>皇</sub> 看<sub>皇</sub> 夫<sub>皇</sub> 王<sub>皇</sub> 孫<sub>皇</sub> 之<sub>皇</sub> 屬<sub>皇</sub> 都<sub>皇</sub> 之<sub>皇</sub>  
 構<sub>皇</sub> 之<sub>皇</sub> 席<sub>皇</sub> 引<sub>皇</sub> 滿<sub>皇</sub> 羽<sub>皇</sub> 討<sub>皇</sub> 衆<sub>皇</sub> 飲<sub>皇</sub> 今<sub>皇</sub> 之<sub>皇</sub>  
 長<sub>皇</sub> 袖<sub>皇</sub> 而<sub>皇</sub> 屢<sub>皇</sub> 傑<sub>皇</sub> 明<sub>皇</sub> 終<sub>皇</sub> 以<sub>皇</sub> 觀<sub>皇</sub> 之<sub>皇</sub> 命<sub>皇</sub>  
 西<sub>皇</sub> 音<sub>皇</sub> 於<sub>皇</sub> 促<sub>皇</sub> 桂<sub>皇</sub> 歌<sub>皇</sub> 江<sub>皇</sub> 上<sub>皇</sub> 之<sub>皇</sub> 艤<sub>皇</sub> 麗<sub>皇</sub> 行<sub>皇</sub>  
 一<sub>皇</sub> 有<sub>皇</sub> 女<sub>皇</sub> 子<sub>皇</sub> 子<sub>皇</sub> 聖<sub>皇</sub> 道<sub>皇</sub> 主<sub>皇</sub>  
 不<sub>皇</sub> 經<sub>皇</sub> 清<sub>皇</sub> 舞<sub>皇</sub> 以<sub>皇</sub> 繁<sub>皇</sub> 鱗<sub>皇</sub> 羽<sub>皇</sub> 爵<sub>皇</sub> 輒<sub>皇</sub> 覽<sub>皇</sub> 終<sub>皇</sub>  
 御<sub>皇</sub> 嘉<sub>皇</sub> 賓<sub>皇</sub> 金<sub>皇</sub> 壘<sub>皇</sub> 中<sub>皇</sub> 走<sub>皇</sub> 有<sub>皇</sub> 碍<sub>皇</sub> 礙<sub>皇</sub> 陳<sub>皇</sub> 曠<sub>皇</sub>  
 燃<sub>皇</sub> 春<sub>皇</sub> 古<sub>皇</sub> 日<sub>皇</sub> 泉<sub>皇</sub> 辰<sub>皇</sub> 置<sub>皇</sub> 酒<sub>皇</sub> 高<sub>皇</sub> 堂<sub>皇</sub> 之<sub>皇</sub>  
 連<sub>皇</sub> 騎<sub>皇</sub> 歸<sub>皇</sub> 從<sub>皇</sub> 百<sub>皇</sub> 內<sub>皇</sub> 若<sub>皇</sub> 具<sub>皇</sub> 着<sub>皇</sub> 俗<sub>皇</sub> 終<sub>皇</sub> 冬<sub>皇</sub>  
 附<sub>皇</sub> 靈<sub>皇</sub> 劇<sub>皇</sub> 戲<sub>皇</sub> 論<sub>皇</sub> 扼<sub>皇</sub> 梳<sub>皇</sub> 椽<sub>皇</sub> 掌<sub>皇</sub> 出<sub>皇</sub> 則<sub>皇</sub>  
 三  
 三  
 三

475 474 473 472 471 470 469 468 467 466 465 464

附堂劇談戲論扼腕力戲文拈掌出則力戲文

連騎歸從百若具養俗冬

煥者吉日良辰置酒高堂以

鄉嘉賓金豐中坐有楫四陳物

躡躑躅

公鏢清解以紫鱗羽爵執覽終

竹乃發已姬彈弦漢女擊琴起

西音於促柱歌江上之韻厲牙

長袖而屢擗因憐以合

樽促席引滿相討樂飲今之

醉累月若夫王孫之屬怨之

偷從翁于外巷無居人並來驪子

俱取魚文玄黃異披結野續芳支

487

486

485

484

483

482

481

480

479

478

477

476

西<sup>自</sup>瑜金<sup>自</sup>得東越王津羽<sup>自</sup>別聊<sup>自</sup>晦  
 匪<sup>自</sup>匪<sup>自</sup>匪<sup>自</sup>旬<sup>自</sup>院<sup>自</sup>自<sup>自</sup>籠<sup>自</sup>洗<sup>自</sup>鳩<sup>自</sup>察<sup>自</sup>廓<sup>自</sup>  
 鷹<sup>自</sup>火<sup>自</sup>種<sup>自</sup>帥<sup>自</sup>羅<sup>自</sup>經<sup>自</sup>慕<sup>自</sup>毛<sup>自</sup>群<sup>自</sup>陸<sup>自</sup>  
 離<sup>自</sup>羽<sup>自</sup>挨<sup>自</sup>烏<sup>自</sup>白<sup>自</sup>翁<sup>自</sup>纒<sup>自</sup>眉<sup>自</sup>揮<sup>自</sup>霍<sup>自</sup>中<sup>自</sup>內<sup>自</sup>林<sup>自</sup>  
 瀟<sup>自</sup>瀟<sup>自</sup>廣<sup>自</sup>廣<sup>自</sup>翦<sup>自</sup>旌<sup>自</sup>塵<sup>自</sup>帶<sup>自</sup>文<sup>自</sup>地<sup>自</sup>路<sup>自</sup>  
 厥<sup>自</sup>肅<sup>自</sup>志<sup>自</sup>未<sup>自</sup>慙<sup>自</sup>時<sup>自</sup>欲<sup>自</sup>晒<sup>自</sup>足<sup>自</sup>鞋<sup>自</sup>置<sup>自</sup>是<sup>自</sup>  
 絕<sup>自</sup>遠<sup>自</sup>出<sup>自</sup>雲<sup>自</sup>門<sup>自</sup>之<sup>自</sup>關<sup>自</sup>馳<sup>自</sup>九<sup>自</sup>狐<sup>自</sup>之<sup>自</sup>塚<sup>自</sup>  
 經<sup>自</sup>三<sup>自</sup>陝<sup>自</sup>之<sup>自</sup>字<sup>自</sup>五<sup>自</sup>之<sup>自</sup>產<sup>自</sup>  
 懺<sup>自</sup>食<sup>自</sup>鐵<sup>自</sup>之<sup>自</sup>獸<sup>自</sup>射<sup>自</sup>嗟<sup>自</sup>赤<sup>自</sup>之<sup>自</sup>虛<sup>自</sup>由<sup>自</sup>鴉<sup>自</sup>  
 軀<sup>自</sup>隔<sup>自</sup>於<sup>自</sup>蔓<sup>自</sup>草<sup>自</sup>禪<sup>自</sup>言<sup>自</sup>鳥<sup>自</sup>於<sup>自</sup>森<sup>自</sup>木<sup>自</sup>  
 夜<sup>自</sup>象<sup>自</sup>處<sup>自</sup>處<sup>自</sup>犀<sup>自</sup>角<sup>自</sup>鳥<sup>自</sup>鐵<sup>自</sup>翎<sup>自</sup>獸<sup>自</sup>  
 足<sup>自</sup>殆<sup>自</sup>而<sup>自</sup>竭<sup>自</sup>來<sup>自</sup>相<sup>自</sup>與<sup>自</sup>第<sup>自</sup>名<sup>自</sup>涼<sup>自</sup>也<sup>自</sup>集<sup>自</sup>  
 于<sup>自</sup>江<sup>自</sup>川<sup>自</sup>識<sup>自</sup>木<sup>自</sup>客<sup>自</sup>張<sup>自</sup>艇<sup>自</sup>舟<sup>自</sup>借<sup>自</sup>二<sup>自</sup>罪<sup>自</sup>  
 與<sup>自</sup>神<sup>自</sup>挂<sup>自</sup>登<sup>自</sup>背<sup>自</sup>星<sup>自</sup>下<sup>自</sup>殿<sup>自</sup>





499

498

497

496

495

494

493

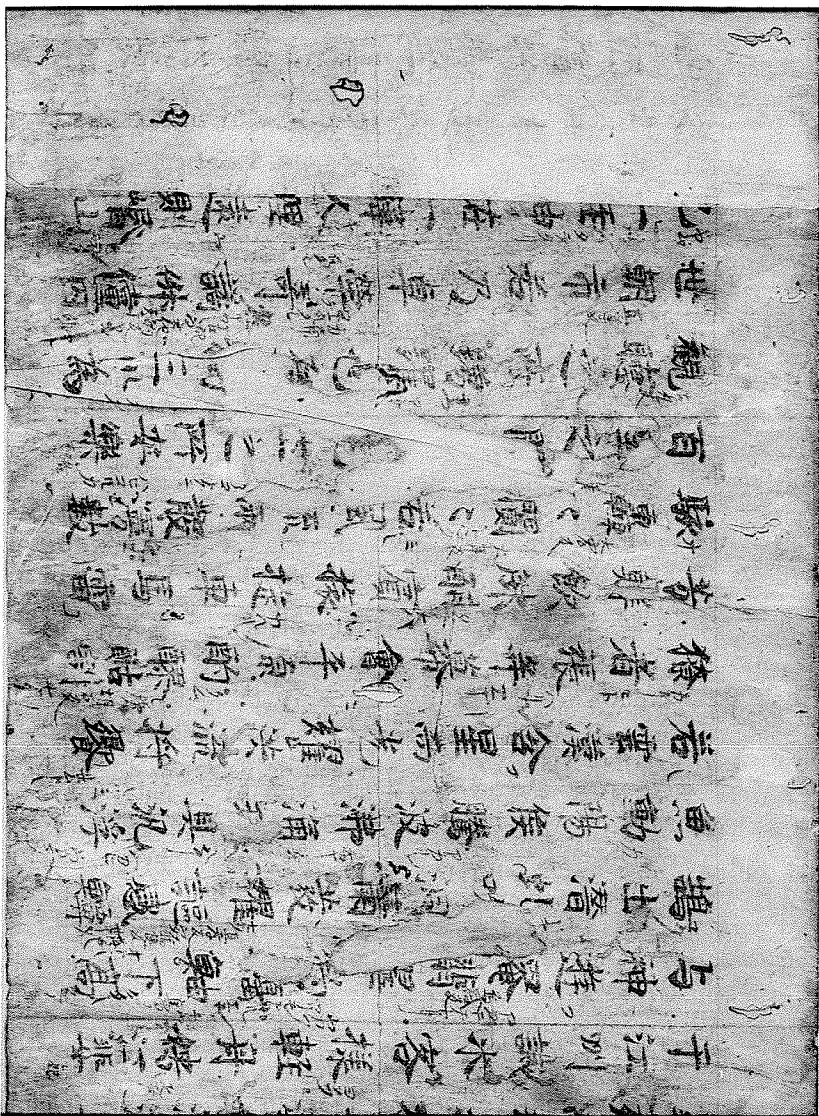
492

491

490

489

488



488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499

于江別誠水客樣輕舟輕舟媽媽呼呼救救也也

與神造神造覆覆謂謂匿匿也也屬屬下下高高

擣擣出出潛潛虫虫以以洞洞蕭蕭教教擢擢謳謳感感譚譚解解也也

第勳陽侯騰波沸涌波沸涌玉具沉浮玉具沉浮

若雲漢含星而光耀光耀流流將將躡躡躡躡

撩者張奔幕會平原酌醪酌醪置置

芳躡躡飲飲鄒鄒踴踴實實揜揜車車馬馬雷雷

駭駭轟轟闕闕若若風風兀兀兩兩聚聚湧湧敷敷

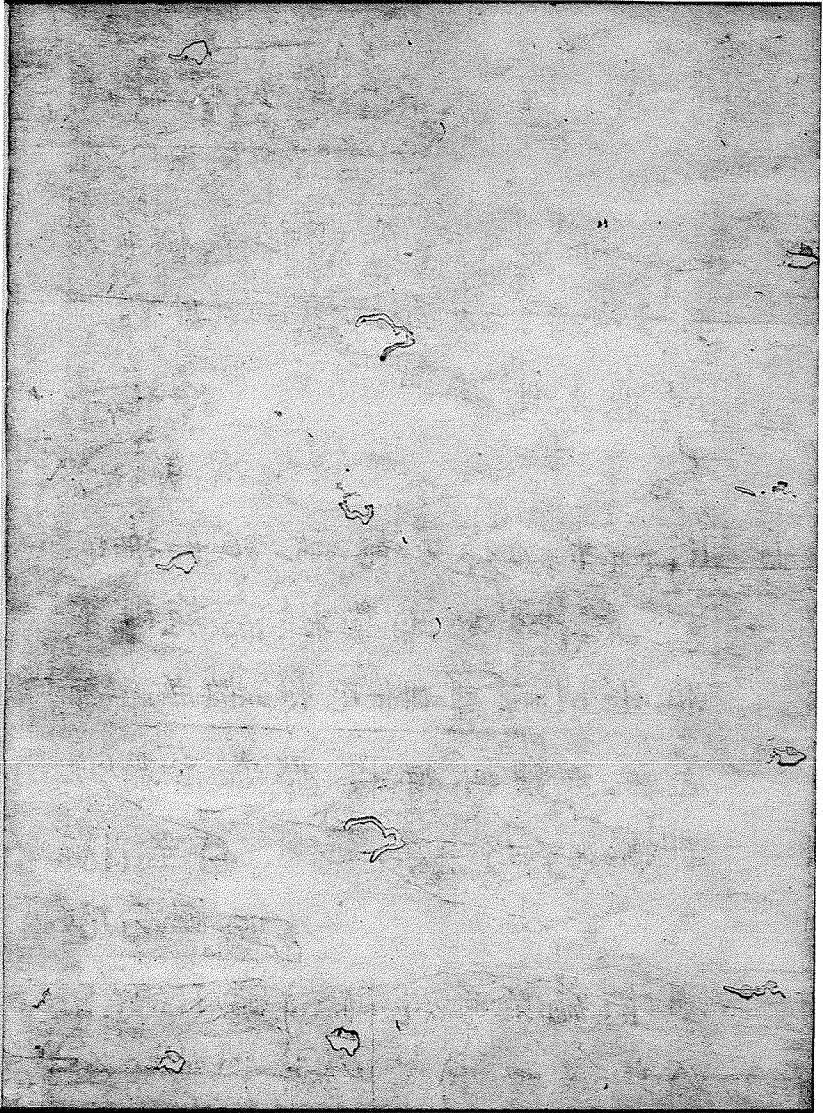
百里之尸尸圖圖邑邑王王之所所安安樂樂也也

觀聽之所踴躍也觀聽之所踴躍也二三二三為為之之

世朝市世朝市若若乃乃卓卓犖犖奇奇蕭蕭體體禮禮內內

已已一一經經神神拔拔一一緯緯人人理理遠遠則則岷岷骨骨山山

511 510 509 508 507 506 505 504 503 502 501 500



以下十五行  
 利重身輕  
 利誠可能  
 翻字不

511 510 509 508 507 506 505 504 503 502 501 500

之精上為井絡天帝運期而會

昌景福豐財豐豐財而興京錫出長弘

之國國生世空之國國安靈化而

非常光見偉志志國國則江漢

炳靈世載其英蔚若相如嶠若

君平王褒辯辯而秀蒙楊雄含

身身挺生幽思綯道德德標藻藻

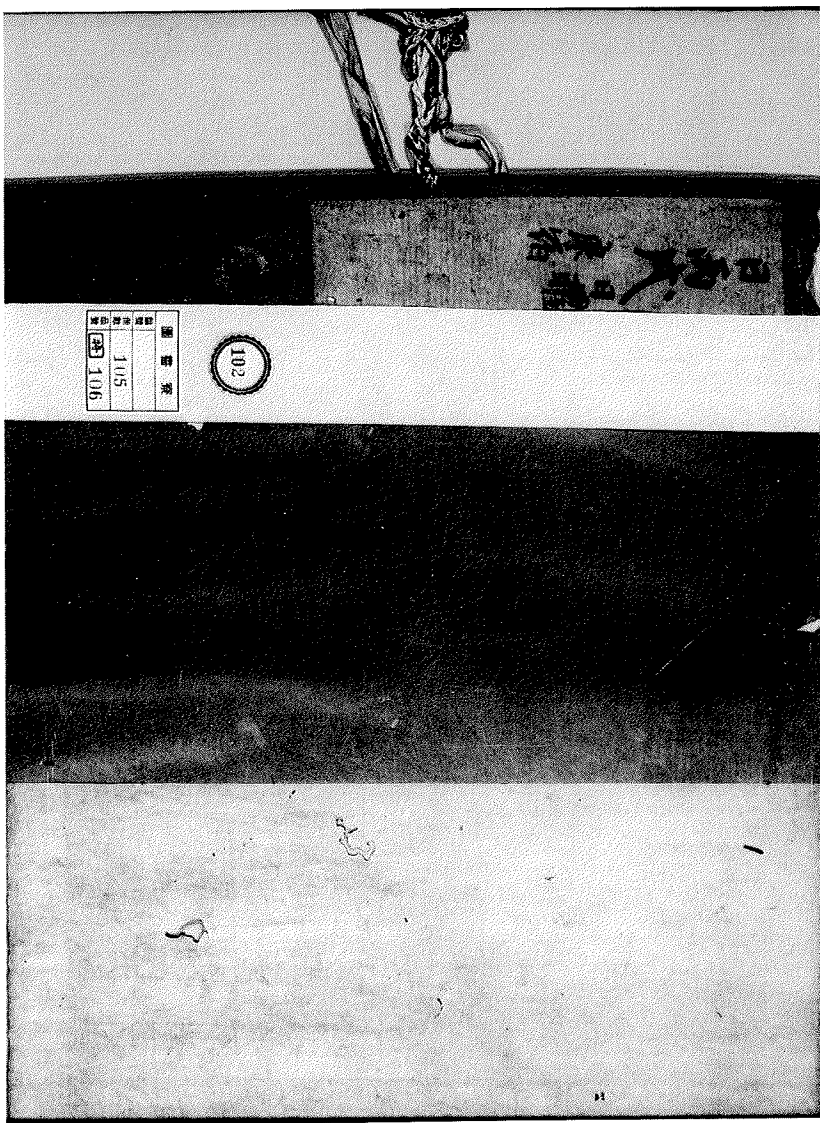
天庭若四海而為儔儔當當中葉而

增增名名畏畏因因國國者者為為警警生生

作者以為裡也也至平國國各為塞塞

因山為郭峻咀咀均長城城豁豁豁豁

巨方巨方守隘守隘乃未莫向兮



514 513 512

514

513

512

(以上管見記第百二卷終皆)

圖 夏之圖有圖

圖 田此言之天

圖 國和國

未若茲都之

下孰<sup>尚</sup>故雖無<sup>有</sup>

帝劉宗下<sup>才</sup>權而自<sup>形</sup>

翻字註

- 2 箝—平ノ声点、及ビ左傍
- 1 小イノ音注(角)
- 2 基—左傍キイ(角)
- 2 散—声点(墨)
- 3 結—左傍ニ返点(角)
- 4 建—付訓、夕ノ下、下ヲヲ補
- 7 角
- 4 辰—右傍シ(角)
- 5 艾—声点(墨)
- 6 鈎—声点(墨)
- 7 臂—右傍井ヨウ(角)
- 7 環—平濁声、左傍シヤウ
- 角 線点あり(朱)
- 7 鑿—声点(墨)
- 8 貳—濁音符(墨) 貳鎧ノ
- 音合(朱)、訓合(墨)
- 8 鎧—去声(朱) 入声(墨)
- 9 旂—線点あり(朱)
- 10 纒—線点あり(朱)
- 10 木—線点あり(朱)
- 10 車—声点(墨)
- 11 穀—右傍コ(角)
- 11 屋—線点あり(朱)
- 12 引—左傍イレ(角)
- 12 先—去声(角)
- 12 鞆—去声(角)
- 13 猜—左傍セ(角)
- 13 戟—付訓、ナカキホコラ
- 塗抹
- 14 躰—濁音符(墨)
- 14 繡—返点ヲ墨ヲ抹消ス
- 14 虎—上声、右傍コ(角)
- 15 梢—声点(墨)
- 15 飛—左返点(角)
- 15 蘇—右傍訓、リツトヲ削
- 除、シヲ重ネ書ク
- 16 陳—左傍ノフル(角)
- 16 巖—平声(角)
- 16 嶽—線点、な(朱)、バ(墨)
- 17 楊—右傍ア(角)
- 17 揮—屋点、ヲ抹消
- 17 建—左傍訓、夕、墨滅
- 17 按—付訓、(朱)
- 18 列—左返点(角)
- 18 蕭—声点(墨)
- 21 斐—線点あり(朱)、声点(墨)
- 22 鼓(欄外)—声点(墨)
- 24 楯—左傍イ(角)
- 24 燭—左返点(角)
- 24 神—声点(墨)
- 26 妃—屋点、迄(墨)、平声(墨) 上声(朱)
- 30 蒸—左傍シヨウ(角)
- 32 辯—声点(墨)
- 32 其—右傍朱筆ヲ認ム、ノ款
- 32 句—声点(墨)
- 34 変—入聲声(角)
- 35 顧—付訓、カノ下、入リヲ補フ(角)
- 35 神—声点(墨)
- 35 具—付訓、下ノ下、王(角)
- 35 障—付訓、クノ下、外ル(角)
- 35 福—入聲声、右傍フ(角)

必穰—濁音符(濁)、右傍「」

ナレリ

音注「」連抹消

49 緝—左返点「」(角)

ヤ山(角)、置字ノ線点「」

41 載—付訓「」ノ下「」ハチ

44 爲工—各左返点「」(角)

49 節—声点(濁)、左返点「」(角)

(1) (朱)

ヲ補フ(角)

45 制—左返点「」(角)

50 階—左傍「」(角)

必農—平声(角)

41 合—左返点「」(角)

45 正—左返点「」(角)

50 乘—平声抹消

必膏—平声(角)

41 辟—「」声、右傍「」(角)

45 三乞—音合符(濁)、右傍「」(角)

50 攝—入聲(角)

必視—左傍「」(角)

41 繼—左返点「」(角)

「」(角)

50 提—左傍「」(角)

必駕—声点(濁)

41 設—右傍「」、左返点「」(角)

必并—右傍「」(角)

50 陪乘攝提—音合符(濁)

必撰—付訓「」ノ下「」(角)

(角)

必夾—声点(濁)、左傍「」(角)

50 運—左返点「」(角)

必籍—右傍「」(角)

41 業—左返点「」(角)

(角)

50 衡—声点(濁)、左返点「」(角)

必伏—声点(濁)、左返点「」

42 叢—初メ「」ヲ「」キ、之ヲ削除、「」ト重ネテ「」

必儲—左傍「」(角)

50 至—宮—各左返点「」(角)

(角)

ヲ削除、「」ト重ネテ「」

必葦—付訓差声「」(角)

51 騶—平聲、左傍「」(角)

必郊—右傍「」(角)

42 樹—左傍「」(角)

「」(角)

52 虞—平声(角)

必梁—左傍「」(角)

43 撞—置字線点「」(角)

47 消—明—左返点「」(角)

52 决—右傍「」(角)

必盛—左返点「」(角)

42 相—左返点「」(角)

47 掃—霞—左返点「」(角)

52 拾—入聲、右傍「」(角)

必疆—右傍「」(角)

44 儀—声点(濁)、左返点「」(角)

48 輅—屋点「」ヲ抹消

52 達—付訓「」(角)、左返点「」(角)

必場—右傍「」(角)

(角)

49 鏗—付訓差声「」(角)

53 萌—平声、右傍「」(角)

必躬—屋点「」ト「」上声(濁)

44 曠—平声、左傍「」(角)

49 萃鑽大内—音合符(濁)

54 崇業—各左返点「」(角)



54 濂—左返点「三角」

59 拜—声点(墨)、左返点「二」

61 區—平聲声、左傍「レ」

点「二」「三」「角」

54 饜—左傍「夕」角

角

左返点「角」

64 田—付訓差声「九」角

54 貪—平声、右傍「夕」角

59 壽—右傍「レ」角、左返点「二」角

64 威—声点(墨)

67 結—左返点「三角」

54 終—左下傍「レ」角、左返点「二」角

「二」角

63 聞—付訓欄肩注「レ」角

68 疾—平声、右傍「レ」角

点「二」角

59 敬—付訓「レ」下「角」

「レ」差声「リ」

68 營—平声、左返点「二」角

55 誼—声点(墨)

60 儀—平声(角)

63 聞—圈—各左返点「二」角

68 叙和—左返点「二」角

55 會—付訓「レ」(朱)

60 示—左返点「三角」

角

68 鐸—入聲声、左傍「夕」角、左音注初「エ」キト書キ、之ヲ削除、改「テ」夕「レ」ト書ク

56 疚—付訓初「メ」ヤ「レ」ニ「夕」

61 愉—左傍「レ」角、疊字

64 掌—付訓「力」ノ「下」七「レ」

「レ」ト書キ、「レ」ニ改ム

線点「六」(朱)

補「角」

68 坐—右傍「レ」角

57 致—酒—各左返点「二」角

61 教—左傍「レ」角

64 掌考—左返点「二」角

68 坐—右傍「レ」角

角

61 布護—左傍「レ」ト「レ」ヤ「ホ」

64 戒事—左返点「二」角

68 作—入聲声(角)

57 幢—右傍「夕」角

ト「コ」リノ合点「角」筆ノ

65 是—屋点「墨」

69 節—声点(墨)

58 奉—左返点「三角」

上「二」(墨)筆ヲ重又

65 謂—備—各左返点「二」角

69 以—聲—各左返点「二」角

58 躑—右傍「レ」ヤ「角」

61 羸—右傍「エ」角、左返点「二」角

角

69 戮—声点(墨)、右傍「レ」角

58 叟—上声、左傍「レ」角

「二」角

65 告—右傍「レ」角

69 戮—声点(墨)、右傍「レ」角

58 至—右傍「レ」角

61 溢—入聲声、右下傍「レ」

65 備—右下傍「レ」角

70 陳—付訓「レ」(朱)

59 恭—右傍「レ」角

子(角)

66 撫—軒中田—各字左返

70 達—付訓「レ」(朱)

71 麗—線点「リ」(朱)

74 歐—左傍「七」(角)

(角)

81 秉鐵—各左返点「三」(角)

71 翼—右傍「ヨ」(角)

74 解果—左返点「三」(角)

78 蟲—平声、右傍「ム」(角)

81 派—左傍「ム」(角)

72 掩迥—左返点「三」(角)

75 儉—右傍「ム」(角)

78 威—声点(墨)

81 子—右傍「ム」(角)

72 馭—右傍「リ」(角)

75 不彈物—各字左返点「三」

78 振—獨…無—各字返点

83 無臬—各左返点「三」(角)

72 不…遇—各左返点「三」

「三」(角)

「三」(角)

83 礫—右傍「ム」(角)

(角)

76 慕—施舌—各字左返点

79 教—濁音符(墨)

83 剛—平濁声坎、右傍「カ」(角)

72 詭—「上」声、右傍「フ」(角)

「三」(角)

79 瑣—左傍「ム」(角)

84 輝—付訓初メ「フ」ノ「卜」書キ、

72 遇—返点「朱」、右下傍

76 教祝—各左返点「三」(角)

79 焉—線点「ム」(朱)、平聲

84 逐—疫—各左返点「三」(角)

フ(世角)

76 祝—屋点「左」抹消、右付

声、左下傍「ム」(角)

84 齋—「平」声、右傍「エ」(角)

76 毛—訓詁符(朱)

訓「ノ」下「ム」ヲ補フ(角)

81 雛—付訓差声「モ」ニヤ(墨)

85 池—屋点「ム」、句点抹消

76 升獻—左字間返点「三」(角)

77 懷—儀—各左返点「三」

81 駭除—左字間返点「三」(角)

85 梢—「魅」—各左返点「三」(角)

76 膏—左返点「ム」(角)

77 失—「嚴」—各左返点「三」(角)

86 蝟—右傍「ム」(角)

76 膳—膏—各左返点「三」

77 驚—「平」声(角)

86 魅—「去」声、右傍「ム」(角)

(角)

77 驚—右傍「ム」(角)

81 方—「上」声点抹消

86 狂—「平」声(角)

76 膏—左傍「ム」(角)

78 獲—右傍「ム」(角)

81 相—「上」声点抹消、付訓

86 軒—「地」—各左返点「三」(角)

76 極—詭点抹消

78 浸—「蟲」—各左返点「三」

差声「ホ」(墨)

86 地—左下傍「ム」(角)

86 膨…良…各左返点「二」

89 畢…入輕声「角」

93 卜征考祥…各字左返点

96 望…左返点「二」

「角」

89 梗…付訓差声「エヤ<sub>全</sub>」

「二」「二」「二」

97 墟…右傍「二」

86 囚…左返点「二」

セシムル才「二」

94 楯…右傍「二」

97 慨…付訓「ノ上」カ「角」

87 冷…左傍「二」

90 曩…左傍返点「二」、其ノ

95 軌…上声、右傍「二」

97 俟…風…各左返点「二」

87 溺…付訓差声「才ホ<sub>全</sub>」

下「二」

95 急…入輕声、右傍「二」

98 祖…左返点「二」

「全」

91 葦目…各左返点「二」

「角」

99 啓…戸…各左返点「二」

87 溺…黄…各左返点「二」

91 取司…各左返点「二」

95 舒…平声、右傍「二」

99 諾…平輕「角」

「角」

92 内有不躋…各字左返点

96 燠…左傍「二」

99 塾…左傍「二」

87 賊…左傍「二」

「二」「二」「二」

96 着…明…各左返点「二」

99 潛…平声、右傍「二」

87 殘…與…象…各字左返

92 不…右傍線点款「朱」

「角」

99 戸…去声、右傍「二」

点「三」「三」

93 和…付訓「二」

96 點…付訓「二」

99 響…付訓「二」

88 曩…平声、右傍「二」

93 育…右傍「二」

96 詭符重ナル…入輕声、

100 觀…多餘義…匪…各字左返

88 囚…上声、右傍「二」

93 佞…右傍「二」

右傍「二」

点「三」「三」

88 殮…左返点「二」

93 考…付訓「ノ上」カムカ

96 防…入輕声、右下傍「二」

101 扈…右傍「二」

88 仲…去声「角」

ヲ補フ「角」

ヨ、左返点「二」

101 瞰…左返点「二」

89 泥…右傍「ハムヤ」

93 祥…声点「墨」、右傍「二」

96 反柿…各左返点「二」

101 湯…平輕声「角」

89 與…左下傍「ヤ」

「角」

96 回…左傍「二」

102 圓…上声「角」

102 末…規…各左返点「二」

105 騶…平聲、右傍「ハ」角

108 嘗…詭点抹消

112 齊…左返点「二」角

102 以…星点「ミ」抹消

105 虞…與…黃鳴…各字左返点「二」「三」「三」角

109 重…譯…各左返点「二」

113 野…爲…爲事…事…有人…各字左返点「二」「三」「三」「三」角

102 世…去声、右傍「セ」角

105 騰…平声、右傍「ト」角

109 譚…入聲、工「キ」角

113 爲…事…事…字…右傍「ハ」角

103 釋…勞…各左返点「三」角

105 牀…声点「ミ」、右傍「シ」ヤ

110 稽…上声「角」

114 尚…付訓「夕」ノ下「フ」フヲ補

103 膺…福…各左返点「三」

105 舞…皇…殖…各字左返点「二」「三」角

110 論…詭点抹消

114 素…撲…字間左返点「角」

103 多…右傍「カ」角

107 圃…聖…唐…各字左返点「二」「三」角

110 遷…邑…各左返点「三」角

114 思…克…已…各字左返点「三」「三」角

103 福…入声、右傍「フ」角

107 豐…付訓「曲」ノ下「カ」ヲ補「角」

111 同…般…各左返点「二」

115 足…所…各左返点「二」角

104 然…右傍「シ」角

107 般…星点「ハ」抹消

111 着…詭点抹消、平聲声

116 屏…平聲声、左傍「セ」角

104 瑞…去声、右傍「スイ」角

111 儉…右傍「ハ」角

112 斯…平聲声、右傍「シ」角

116 象…去声「角」

104 備…付訓「シ」ノ下「フ」サニ

112 于…登…各左返点「三」角

117 抵…谷…各左返点「三」角

118 所…寶…各左返点「三」「三」角

ヲ補詭ス角

108 洎…荒…各左返点「二」

118 瑱…左傍「シ」角

119 咸…右傍「ト」ノ「角」

104 致…祥…各左返点「二」角

108 丁…平聲声「角」

112 封…付訓「シ」角

119 咸…右傍「ト」ノ「角」

104 祥…右傍「ヤ」角

108 零…諧…掌…各字左返点「二」「三」角

112 于…登…各左返点「三」角

119 咸…右傍「ト」ノ「角」

104 圍…付訓「差」声「フ」金「カ」カ

112 于…登…各左返点「三」角

118 所…寶…各左返点「三」「三」角

119 咸…右傍「ト」ノ「角」

104 圍…付訓「差」声「フ」金「カ」カ

112 于…登…各左返点「三」角

118 所…寶…各左返点「三」「三」角

119 咸…右傍「ト」ノ「角」

「ハ」

点「二」「三」角

120 其—右傍、上角

127 踵—武—各左返点、三角

130 概—去声、左傍、カ、角

136 且—線点、人、名、味

121 莫—声点、墨、左傍、メ、イ

三角

131 志反—不覺—無節—離

136 無懼—各左返点、三角、角

三角

127 踵—付訓差声、イ、至、全

—各字左返点、三角、三角、三角、三角、三角、三角、三角

137 不離—重—各字左返点、三角、三角

121 茨—声点、墨、左傍、个、フ

128 未整値—各左返点、三角、三角

三角、三角

三角、三角

三角

三角

131 節—声点、墨

137 輜—左傍、イ、角

121 難蔀—各左返点、三角、三角

129 有—疾—各左返点、三角、三角

132 戚—國—未學—得—各

138 其—右傍、上角

122 觀—声点、墨

三角

字左返点、三角、三角、三角、三角、三角、三角、三角

138 夫—右傍、上角

122 之—返点、抹消

129 疾—返点、抹消

132 得—声点、墨

138 君—各左返点、三角、三角

122 至—去声、角

129 不—平濁、声、坎、角

133 批—不假路—纂—業—

138 鞋—左下傍、上角

122 平—補入—声点、墨

129 究—詳—各左返点、三角、三角

各字左返点、三角、三角、三角、三角、三角、三角、三角

139 寒—右傍、フ、サ、角

123 化—去声、角

三角

三角

139 不—顧—制—各字左返点、三角、三角

123 胡—付訓、カ、力、上、ナ、上

129 詳—右傍、ハ、井、ラ、カ、ナ

133 批—声点、墨

三角、三角

ヲ、補、フ、角

三角

134 翹—右傍、个、上角

139 顧—左傍、カ、人、上角

123 翔—付訓差声、カ、フ、セ、フ、セ、上

130 爲實—各左返点、三角、三角

135 若—右傍、上角

139 珮—付訓、カ、ノ、下、上、ヲ、補、説、角

124 從雲—各左返点、三角、三角

130 爲—星点、上、墨

135 乘奔—各左返点、三角、三角

139 制—右傍、上角

125 寓—上声、右傍、フ、上角

130 賓—声点、墨

136 見困—且—各字左返点、三角、三角

140 鑿—声点、墨

125 輝—平声、字下、井、角

130 梗—上声、左傍、カ、上角

三角、三角、三角

140 途—声点、墨、右傍、上、左返

点「角」

140 不變玉…不亂步—各字

左返点「三」「三」「三」「三」

141 藁—右傍「フ」左傍「子」工

「角」

141 銀—左返点「三」

142 忍…用財—各字左返点

「三」「三」「三」

142 忍—右傍「フ」

143 珍—句点墨

143 仕役…畏…盡…各字左

返点「三」「三」「三」

143 役—右傍「工」

143 之—線点「ハ」誤り「欠」

144 無…不—各左返点「三」「三」

「角」

144 様—左傍「七」

144 藁—声点「墨」、左傍「カ」

「朱」

144 不—左傍「セ」

145 志—左返点「三」

146 勞…輸…財…同—各字

左返点「三」「三」「三」

146 財—屋点「窓」抹消

146 鏡—右傍「セ」

147 行—右傍「工」

147 雍熙—「平」平聲声「角」

147 洪—「平」声「角」

148 執—右傍「フ」

148 顧—付訓「カ」下「ハ」リ「テ」

「ラ」補「角」

148 懷…節念—各字左返点

「三」「三」

149 于命怨…見贊—各字左

返点「三」「三」「三」「三」

149 怨—右傍「ウ」

150 含…九…成議登—各字

左返点「三」「三」「三」「三」

151 階章…有被—各字左返

点「三」「三」「三」

152 可…焉…好—各字左返

点「三」「三」「三」

153 勳—付訓差声「金」

「至」

153 輸—右傍「工」

153 忘…為仇—各字左返点

「三」「三」

153 怨—「去」声、右傍「フ」

153 好—右傍「フ」

153 生憂—各左返点「三」「三」

153 憂—屋点「至」抹消

153 所以載舟—各字左返点「三」「三」

「角」

153 所以—字間右傍「ハ」

153 所以覆舟—各字左返点「三」「三」

「角」

153 所以—線点「リ」

153 堅—「平」声、右傍「フ」

153 履—「木」起…裁—各字左返点

「三」「三」「三」

153 履—右傍「フ」

153 霜—「去」声「角」

153 藁—声点「墨」

153 裁—線点「リ」

153 昧—右傍「フ」

153 制—声点「墨」

153 恭—左返点「三」

153 服—声点「墨」

158 裁一 声点(還)

返点(三)(三)(三)(角)

フ(角)

補説(角)

158 壯一 左返点(三)(角)

164 人一 右付訓(ト)ト(ク)ノ

167 醉一 左返点(三)(角)

172 習一 星点(抹消)

159 觀一 騁一 絆雖一 以一各

塗抹ス

168 道一 畏戒一 各字左返点

172 非一 星点(抹消)

字左返点(三)(三)(三)(三)(三)(角)

164 是所學一 各字左返点(三)

(三)(三)(三)(角)

172 迷一 付訓(ハ)リ(介)ノ(上)ア(ト)

159 絆一 返点抹消

(三)(三)(角)

168 誼一 右傍キ(角)

ヲ補フ(角)

159 糸一 付訓差声(ツ)至(ク)至

164 是一 付訓初メ(シ)入(シ)ト

168 戒一 付訓差声(イ)ア(シ)至

172 幸一 右傍(七)イ(角)

160 積穽填敷一 各字左返点

書キ、シニシニ改ム

メ(三)(角)

172 見一 右傍(シ)、左返点(三)(角)

(三)(三)(三)(角)

164 安所習一 各字左返点(三)

168 懼一 右傍(オ)シ(角)

172 指一 上声(角)

160 置一 左傍(シ)ヤ(角)

(三)(三)(角)

168 惘然一 付訓初メ(ホ)レ(ク)

173 所聞一 各字左返点(三)(三)(角)

160 無一 左返点(三)(角)

164 飽一 右下傍(ハ)ウ(角)

ル、シト書キ、ホレタ

164 有微一 寡識一 各字左返点(三)

161 規一 左傍(キ)角

165 不知一 臭獸一 所(入)

ルコトト重ネ書ス

(三)(三)(三)(角)

161 怨一 左傍(不)シ(角)

不一 各字左返点(三)(三)(三)(角)

170 所以爲一 失一 各字左返

165 在一 左返点(三)(角)

161 濟一 句点(還)、左付訓差

(三)(三)(三)(三)(角)

点(三)(三)(三)(四)(角)

165 恨一 左返点(三)(角)

声(ト)至(至)、左返点(三)(角)

165 威一 上声(角)

170 談一 左傍(ム)ム(角)

165 墳一 平声、右傍(フ)止(角)

162 志一 基一 各字左返点(三)(三)(角)

166 齊一 咬一 各字左返点(三)(三)(角)

170 失一 付訓(ク)ノ(上)ウ(シ)ラ

166 不睹一 各字左返点(三)(三)(角)

(角)

(角)

補説(角)

177 駐一 右傍(ク)己(角)

必擊一 東一 莫持一 各字左

166 疑一 付訓(ク)ノ(上)ウ(シ)ラ補

171 言一 付訓(ク)ノ(下)フ(シ)ラ

177 美一 星点(抹消)

(角)

(角)

(角)

(角)

177 美得聞…各字左返点「三」角

「三」角

178 尚茲…雖…各字左返点

「三」「三」角

179 敏…左返点「三」角

181 麗…付訓「シ」下「ル」木「

シ」ヲ補フ角

181 啓…南…各左返点「三」角

角

182 居…陽割…環跨…各字

返点「三」「三」「三」角

182 壞…右傍「ニ」ノ類音注

角

183 爲壇…各左返点「三」「三」角

183 莖…右傍「ヒ」角

183 敬…「上」声、左傍「マ」

角

184 難詳…各左返点「三」「三」角

184 詳…付訓「シ」下「ハ」ヒ「

カ」ヲ補フ角

184 開…右傍「ク」乙「角

184 開…右下傍「サカヘ」有

リ角

184 開亞…各左返点「三」「三」角

185 楊…東…各左返点「三」角

角

186 爲壙…涌…後…各字左

返点「三」「三」「三」角

187 盪…左傍「ソ、ク」其ノ下

「ク」ヲ補フ角

187 推准引端…各字左返点

「三」「三」「三」角

188 采…「上」声、左傍「シ」角

188 璞…左傍「ハ」角

188 隨…「平」声角

189 錯…左傍「カ」角

189 堊…右傍「ア」角

190 碧…右傍「ヘ」角

190 粟…右傍「ヨ」角

191 穀…左傍「カ」角

191 解角…各左返点「三」「三」角

192 耕…右傍「カ」角

192 揚…右傍「ア」角

192 揚…「刈」弄…各字左返

点「三」「三」角

192 弄…付訓「フ」上「モ」テ「

シ」ヲ補フ角

193 曲…左返点「三」角

194 喇…左傍「ラ」角

194 嶠…左傍「ク」角

194 嶺…左傍「ク」角

194 叢…左傍「シ」角

194 巖…左傍「ク」木「角

194 噉…「平」声、左傍「キ」角

195 屹…「字」下「キ」角

195 屹嶺…左傍訓「ト」ナカタ「エ」

「ナ」ノ左「ニ」「三」ノ如ク「アリ、意

味不明

195 含…雪…各左返点「三」「三」角

196 嶺…左傍「リ」乙「角

196 嶺…右傍訓「リ」ノ「シ」ヲ塗抹

196 豁…「入」声、左傍「ク」角

196 絶…右傍「エ」タ「角

196 鞞…左傍「キ」角

197 隱天…觀…「電」各字左返点

「三」「三」「三」角

197 電…左下傍「ノ」角



198 狐—右傍「ハ」角

200 行—字下「ハ」角

二箇アリ、意味不明、  
平声、右傍「リ」ヨ、左傍

201 陰—句点抹消

198 限—線点ナリ「ハ」

201 菌—左傍「ク」井「ハ」角

平声、右傍「リ」ヨ、左傍

207 起—右傍「オ」コ「テ」角

199 行—左傍「エ」ハ「ハ」角

201 蠶—左傍「ハ」井「レ」角

「ハ」角

207 増—右傍「テ」ハ「ハ」角

199 曠蕩—各「上」上声角、蕩

201 生—限—各左返点「三」「三」角

204 櫻—声点「墨」

208 哀—左返点「三」角

ノ線点ナリ「ハ」

角

204 桑—右傍「ハ」水角

208 冥—左傍「ハ」ハ「ハ」角

199 塚—右傍「モ」ハ「ハ」角

201 生—線点ナリ「ハ」角

204 椰—左傍「ハ」角

208 眼—右傍「ハ」イ「ハ」角

199 坂—「上」声角

201 密溢—右傍「ハ」イ「ハ」エ「キ」角

204 柑櫛—右傍「ハ」イ「ハ」ヨ「ヨ」角

208 杏—右傍「エ」ハ「ハ」角

199 然—字下「ハ」角

202 流—隔—無—侈—弗—

205 櫻櫛—左傍「ヨ」ハ「ハ」ハ「ハ」角

209 森—右傍「レ」ム「ト」イ「ヨ」、カ「二」角

200 截—声点「墨」、右傍「テ」ハ「ハ」

論—各字左返点「三」「三」「三」角

205 嬋—左返点「三」角

角

ヲ塗抹ス

「三」「三」角

205 媛—右下傍「ユ」ハ「ハ」角

209 尊—右傍「ソ」レ「ソ」レ「ハ」角

200 障—声点「墨」

202 間—「ハ」声角

206 布—「ハ」敷—「ハ」各字左返点「三」「三」「三」角

209 刺天—各左返点「三」「三」角

200 嚙—右傍「ハ」ハ「ハ」角

202 能—右傍「ア」タ「ハ」ハ「ハ」角

206 敷—右傍「ハ」ハ「ハ」角

210 遊—下—各左返点「三」「三」角

200 銚—平聲声角

208 擣—付訓初「ハ」ア「ハ」ト「音」

206 菜—右傍「ハ」ハ「ハ」角

210 穀—声点「墨」

200 擊—「ハ」聲声、左傍「カ」ハ「ハ」角

キ、「ハ」ハ「ハ」ニ改ム

206 葉—右傍「ハ」ハ「ハ」角

210 攪—声点「墨」、右傍訓初「ハ」

角

208 柶—左傍「ハ」ハ「ハ」ハ「ハ」角

207 合—付訓「ア」ハ「ハ」ハ「ハ」補

木「ハ」ト「音」キ、其上「ハ」ハ「ハ」ハ「ハ」

200 榘—「ハ」平声、左傍「ハ」ハ「ハ」角

204 榘—「ハ」ハ「ハ」声点「墨」平声ニ

説角

ハ「ハ」ト「音」ハ「ハ」ハ「ハ」ハ「ハ」ハ「ハ」

200 榘—「ハ」平声、左傍「ハ」ハ「ハ」角

合点、「ハ」平声点横ニ「ハ」点

207 重陰—各返点「三」「三」角

ハ「ハ」角

20 操—平声、左傍「夕」角

23 縁行—各声点(墨)、右傍

26 密—平声、左傍「八」角

29 蛇—平声、右傍「匕」角

20 縱—左傍「テ」角

訓ハエレノクハ踊字欵

26 滴—右下傍「卫」角

29 鱒—左傍「世」角

20 戲—右下「夕」角

28 坵坂—右傍「夕」角

26 護—左傍「コ」角

20 龜—平声(角)

20 巖—付訓「ノ」下「夕」キ

23 澶—右傍「夕」角

26 汙—声点(墨)

20 鼈—平声、右傍「夕」角

ヲ補フ(角)

23 陸—「入」声(角)

27 溢—右傍「レ」上(角)

20 鮫—右傍「カ」角

21 鴉—声点(墨)

23 離—右傍「山」角

27 飲—声点(墨)、付訓差声

20 鮫—右傍「カ」角

21 翔—上—各左返点「二」

23 阿—上声、左下傍「ア」角

27 投—付訓「ノ」下「ヨ」于

21 奈蛇—右傍「非」左傍「子」角

(角)

24 靡—読点抹消

ヲ補フ(角)オモムク欵

21 陵—左下「上」角

21 翔—右傍「山」左傍「力」角

24 茸—濁音符(墨)

28 澈—声点(墨)、読点抹消

21 盧—声点(墨)

21 騰後—平声、右傍「下」

24 瀆—右傍「ト」角

28 軋—付訓差声「大」上「世」

21 貯—去声(墨)、上声(朱)

ハエレ(角)

25 澹—声点(墨) 右傍「コ」

28 軋—付訓差声「大」上「世」

23 莞—左傍「夕」上(角)

22 鐘—声点(墨) 右傍「コ」

(角)

左傍「ハ」角

24 段—右傍「カ」角

(角)

25 穴—声点(墨)、左返点「コ」

28 屐—去声、左傍「コ」上(角)

24 茆—右傍「ハ」角

22 箠—右傍「キ」上(角)

(角)

28 滅—左下傍「非」角

24 茆—右傍「ハ」角

22 箠—左傍「八」角

25 潛—平声、右傍「世」角

29 蝨—平声(角)

24 茆—右傍「ハ」角

22 箠—字下「セ」上(角)

26 没—「入」聲、右傍「中」

29 有—蛇—各左返点「二」

22 榮—右傍「个」角

23 鉦—右傍「カ」角

(角)

(角)

25 葩—句点(墨)、右傍「个」角

226 鏡—声点(墨)、左傍「コ」

227 脈—右傍「ハ」(角)

不能

228 蔚—右傍「フ」(角)

(角)

226 鷗—左傍「エ」(角)

229 膝—左傍「イ」(角)、授ノ音注款

235 薑—右傍「ヤ」(角)

228 吹—付訓「ノ」上「ハ」補説(角)

226 搗—平声(角)

229 末—屋点「抹消

235 薯—付訓初メ「ニ」(角)

229 蔚—平声、左傍「フ」(角)

226 鷗—声点(墨)

230 興—読点抹消

傍「ハ」(角)

230 杭—右傍「フ」(角)

227 鷗—右傍「ハ」(角)

230 澄獨—左傍「ラ」(角)

235 芋瓜—左傍「フ」(角)

240 箱—右傍「フ」(角)

227 嚶—右傍「ア」(角)

230 篠—付訓「上」ノ上「イ」ヲ

235 櫻—右傍「ハ」(角)

240 葉—声点(墨)、音注略又如字

227 澹—「上」声(墨)、去声(朱)

補説(角)

236 樽—付訓初メ「ニ」(角)

款

左傍「エ」(角)

230 爲概—各左返点「ニ」(角)

書シ、「ニ」ヲ塗抹ス

242 筍—付訓初メ「タムム」ナト書

227 隨波—右傍「ナ」(角)

230 概—左下傍「カ」(角)

236 棗—右傍「セ」(角)

キ、「タカム」ナト訂ス

返点「ニ」(角)

232 釘菽麥—右傍「キ」(角)

236 榴—右傍「フ」(角)

242 悲—右傍「シ」(角)

228 寶—右傍「ト」(角)

232 荳字線点「リ」(朱)

236 櫻—濁音符(墨)、平濁声

242 蕪—右傍「キ」(角)

228 浸—付訓「下」ノ下「フ」

「ハ」(角)

236 鄧—右傍「ト」(角)

242 薑—右傍「キ」(角)

左返点「ニ」(角)

233 與—疊字線点「リ」(朱)

236 薛—左傍「ヘ」(角)

242 醜—右傍「レ」(角)

228 彼—左傍「カ」(角)

234 藪—平声、左傍「シ」(角)

237 荔—声点(墨)

244 驟—平声(角)

228 箱—字下「フ」(角)

234 荷—左傍訓「七」初「解」説

237 若薇—各「入」聲(平声)

244 款—声点(墨)、付訓差声「フ」

七「九」(平声)

244 浮—右傍「フ角

248 琢—声点(墨)、左傍「フ角

字左返点「フ角

249 連網躍野—各字左返点「フ角

244 蠟—付訓差声「フ角

上角

「フ角

「フ角

九<sub>七</sub>七<sub>七</sub>、右傍「フ角

248 狎搗—各声点(墨)

252 違—付訓「フノ上カ力ラ

248 服—付訓「朱

244 浴蠟—刻合符抹消

249 媚—去声、右傍「フ角

補説角

248 駢—入声角

245 酎—声点(墨)

角

252 彈—付訓「朱

248 驛—右傍「フ角

245 弘宗綏接—各字左返点

249 巾—平聲声角

248 徵—左傍「フ角

248 致飾程臺—各字左返点「フ角

「フ角

249 幘—左傍「フ角

248 增哀—各左返点「フ角

「フ角

246 以—右傍「フ角

249 鮮—右傍「フ角

248 客—音説符(朱)

249 傳—付訓初メ「フハウト書キ

247 搦—右傍「フ角

250 雜錯—右傍「フ角

248 賦—歸—各左返点「フ角

「フ塗抹ス

247 讓—付訓「朱

251 受爵儂醜—各字左返点

角

249 便—付訓「フアセヤカナリ

247 堂—各左返点「フ角

「フ角

254 稱—声点(墨)

249 連—平声角

248 琅玕—各平聲声角、

補フ角

254 歡—右傍「フ角

248 分—返点抹消

「フ右傍「フ角

251 躑—右傍「フ角

248 方軌齊軌放—各字

248 彈—付訓「朱

248 充—方—各左返点「フ角

251 交—付訓「フノ上「フ

左返点「フ角

248 機—付訓差声「フ角

角

「フ補フ角

248 軻—右傍「フ角

248 澗—声点(墨)

248 彫—平声、右傍「フ角

251 師禮无違彈琴撤籥—各

247 惟—右傍「フ角

248 也—見セ消チ符号(朱)

引着ー見せ消ち符号(朱)

合点(墨)

〔朱〕

引權ー声点(墨)、付訓〔朱〕

引奉ー声点(墨)

引葦薙ー傍訓「シナハ」四款

引生ー線点(墨)

引為門ー為ノ付訓〔朱〕

引偉ー句点抹消

星点〔墨〕

引寶ー線点(墨)

引阻ー星点〔抹消〕

引蒙ー此ノ字下蠹損、〔下カ〕崔

引駿ー声点(墨)、付訓初メ

引行ー左傍訓初メトトト

引紛ー返点抹消

引、付訓「才ホイナ」此

引イト書キ、其ノ上ニ

書キ、个ニ訂ス

引驚ー星点〔抹消〕、詭点朱ニ

見工

引井ト重エ書ス、疊字

引舉ー付訓〔朱〕

テ抹消歟

引敬ー疊字線点(朱)

ノ左傍「ル」塗抹

引常ー訓詁符(朱)

引蓋ー星点〔抹消〕

引允蒸温良ー右傍ニ「口」

引乘ー声点(墨)

引圖ー詭点(墨)、返点抹消

引敬ー線点(朱)

□田ノ付訓見工

引枝ー付訓差声「工」

引驗ー付訓〔朱〕、〔ノ〕上

引裁ー疊字線点(朱)

引言ー付訓「下」ノ下汚損

引子ー線点(朱)

引痕アリ、意味不明

引出ー句点抹消

引草ー声点(墨)

引流ー線点(朱)

引魁ー声点(墨)

引流ー付訓〔朱〕

引柳ー反切注於ノ下字破

引倚ー疊字線点(朱)

引土ー音詭符(朱)

引汨ー線点(朱)

損ノ為ニ不明

引欄眉注樞也江中納言破

引頁ー詭点抹消、句点及

引沛ー線点(朱)

引捷ー声点(墨)

申也ハ原本一行ニ書ク

引合点(墨)

引菌ー付訓「井」ノ右横ニ「

引長ー付訓〔朱〕

引陳ー付訓〔朱〕

引所著ー所ノ線点(朱)

アリ

引也ー見せ消ち符号(朱)

引稱ー付訓〔朱〕

引方ー声点並ビニ詭点(墨)

引荔ー声点(墨)

引焉ー見せ消ち符号(朱)

引孝ー若ノ誤字歟、星点

引里ー訓詁符(朱)

引簾ー声点(墨)

371 忽而一西ノ声点(墨)

388 横一付訓(口)上存疑、九

塗抹、音合符(朱)ノ上二

(墨)ヲ抹消

374 礫一声点(墨)

条本(口)上ノ訓アリ

更ニ墨ヲ重ネル、眼ノ

必疎一線点(口)朱

375 鎌一星点(口)墨

390 雲一声点(墨)

星点(口)抹消

必蕭一詭点抹消

376 縁以一以ノ付訓(口)朱

391 植一星点(口)抹消

44 山一訓詁符(朱)、(口)山ノ

427 柅一声点(墨)

376 湯一声点(墨)

394 阪一星点(口)抹消

如キ墨痕アリ、意味不

428 羞一付訓(口)朱、(口)ノ上二(口)ア

377 圃一詭点抹消

394 郁一声点(墨)

明

431 雲一詭点(墨)

378 物一星点(口)墨、詭点抹消

394 鏡一声点(墨)

416 園一訓詁符(朱)

431 雲一詭点(墨)

消

395 服一付訓(口)朱

417 橙一声点(墨)

433 懶一声点(墨)

378 異一線点(口)墨

397 飄一付訓(口)朱

418 生一右下傍ニ圈点アリ

433 上(口)上声抹消、(口)去声(墨)

378 蠟一声点(墨)

398 樂一声点(墨)

意味不明

434 且一詭点抹消

378 檄一句点(墨)

400 讓一上濁(去)両声(墨)

419 風一詭点ノ位置二、墨

434 實一詭点抹消

378 榎一声点(墨)

405 莠一星点(口)抹消

ノ(口)印アリ、意味不明

434 江一声点(墨)

378 宿一右傍訓(口)丁(口)ノ上二ハ

407 緜一詭点抹消

419 烈一線点(口)朱

434 出(口)一線点(口)朱

抹消

410 脉一声点(墨)

419 莢一宇ノ上汚損アリ

434 屋一訓詁符(朱)

378 鴉一濁点(朱)

412 門一詭点(墨)

419 區一声点(墨)

435 衢一訓詁符(朱)

378 鴉一左付訓(口)抹消

413 有(口)一見セ消(口)符号(朱)

419 霏一平声ヲ抹消

437 亞一付訓差声(口)全(口)意

378 吟一声点(墨)

414 隱賑一付訓(口)力(口)ト(口)

419 徽一線点(口)朱、(口)平声

438 市一声点(墨)



昭和十七年に西園寺家より、宮内庁書陵部に献上された、西園寺家累代の家記「管見記」全百五軸の形状は、大半が具注曆・消息・懐紙等を翻して、その紙背を利用して書写されたものである。このうち、第二百二卷「後宇多院御灌頂記」(延慶元年正月廿六日廿七日隆長卿記)及び第一百五卷「室町殿春日社参詣参仕公卿殿上人諸大夫衣文事」(明德二年九月十五―廿日記)の両軸の裏文書は、「文選」無注本卷二である。第一百五軸の表文書の年紀が明德二年であるため、当然書写も室町初期と比定されるのが普通であるが、背記の「文選」断卷は更に遡る時代の書写に係るものと見做される(通常、本資料の如き漢籍が紙背文書となることは稀で、逆の場合が多く、従つて裏文書の方が後筆であることが常態であるが、本資料は前記の如く大量の反故の一部に紛れて紙背を利用されたものである)。しかしながら、この両卷の「文選」断卷はともに書写年代を明らかにする識語等の明徴を欠いている。第二百二卷の紙背文書には、一部日野俊光加点の「白氏文集」卷十六の断卷が混じており奥に「病中見合菅家証本重移点 前黄門郎俊光(花押)」の識語がある。俊光の官銜に照せば、この「文集」断卷は鎌倉末期(正安より文保の砌)の加点であると推考される。しかして「文選」断卷は、この「文集」断卷に比し更に古色を呈し、後述の如く書写は院政初期を降らぬものと推定せられる(小林芳規博士の認定による)。

文選無注三十卷本の残卷・残編としては敦煌本の卷第廿五「史論・史述贊」、卷第廿三「三月三日曲水詩序・王文憲集序一首」の残編、本邦伝存のものとして上野氏儲藏卷第一残卷、東寺観智院旧藏卷第廿六残卷、著名なところでは東山御文庫蔵九条家本全廿二卷、及び猿投神社藏卷第一(二種)、求古楼旧藏卷第三などが知られている。就中、九条家本の一部、及び猿投本の弘安五年書写本が最古のものとして知られるが、本資料はこれらに比肩しそれを溯り得るものである。かつ最近時雨亭文庫の秘庫より見出された菅家本卷第二との関係が最も注目されるところである。茲に宮内庁書陵部の允許を得て、影印と翻刻をなすに当り聊かその解題を叙べる。

本書の書誌の概要を記せば、凡そ以下の如くである。第二百二・第一百五卷の形状は「管見記」の僚卷と同じく、浅葱鼠無文の鳥の子襦紙軸装で、八双は竹、軸は八角の檜材を用い、紐は緑と白とで編める真田平紐を用いる。見返しは楮の素紙。



料紙は両軸ともに楮紙であるが、第二百二巻は前記の如く紙質を異にする。「白氏文集」断卷を混える<sup>(4)</sup>。紙背文書は反古紙として裏面が使用せられたものである故、装幀に際し卷子本は天地を截断されるのが常であるが、本書もまた紙高廿七糎で天地に切損を被り、紙端の文字をまま失っているのは遺憾である。各紙の長さは約四九糎前後、第二百二巻は十九紙継ぎ（うち第六紙迄は「白氏文集」断卷）、第二百五巻は十二紙継ぎである。薄墨で罫を画し、界高廿二糎、界幅二・五糎、天地に切損があるが欄眉余白五糎、欄脚余白一・八糎を残す。一行十三字前後を収める。第二百二巻には全紙裏打が施され、訓点及び角筆点の判読を著しく困難ならしめている。第二百二巻末尾の十五行は殆ど解読不能である。

次に内容であるが、両軸は順序を倒しており、これを正すならば第二百五巻の断卷は「東京賦」の「(夫子)者、乃整法服、正冕帶」より、「南都賦」の「微眺流睇、蛾眉連嬈」に至る二五九行を存し、間に爛脱は存しない。第二百二巻の初行はすなわち第二百五巻末行に続く「於是齊僮唱兮列趙女」より、「蜀都賦」の末尾「猶未若炫都之(無量也)」に至る二五五行を存し、これにも中間の欠失等は存しない。蓋し、この両軸に亘る断卷はもと一具の巻第二を分割し反故したものであろう。この点については更に次の如くの興味深い事実を指摘することができる。

九条家本「巻二賦乙京都中」に収める所は、「東京賦・南都賦・三都賦序・蜀都賦」の諸編である。これによつて勘える<sup>(5)</sup>と本書(即ち第二百五巻の巻首)には猶「東京賦」の半過が接続していたものかと想像されよう。ところが前述の時雨亭文庫襲藏の菅家本巻第二には「自東京賦<sup>(6)</sup>半過到蜀都賦終 昔在公筆」と見えて、適菅家本にあつては本書と同じく、「東京賦」の半過を巻首としてゐることが知られる。通行の有注六十巻本は無注冊巻本の巻数を二倍にしたもので、六十巻本の二巻分に収められる作品が冊巻本の各一巻分に相当するものと考えられ、冊巻本の巻第二は六十巻本の巻第三と四の作品を収載する九条家本の作品分属の形が正しいとも見做される(本書の第一八〇行の欄眉に見える「注四」の文字は、有注六十巻本に於てこの「南都賦」以下が巻第四に分載されることを意味しよう)。しかしながら、菅家本に於ける作品分属の仕方と本書の一致は、古く当時の博士家に於ける無注冊巻本の各巻の作品分属のあり方に区別のあつたことを考えさせる。恐らく巻第二の

作品分属は式家本では「東京賦」冒頭から、菅家本では「東京賦」の半過（未公開の時雨亭文庫本の巻首が本書と同じ）（夫子）者、乃整法服」に始まるか否かは知るに由ない）からという区別があつたものであろう。かように考えるならば、本書に於て欠失しているのは装禎の際に剪出されたと覺しい「蜀都賦」大尾の「無量也」の三字のみで、ほぼ完全に無注冊巻本（菅家本）巻第二の内容を具備していることにならう。

本書の本文を検して容易に気付かれるのは、唐の太宗の名諱である「世」「民」の闕筆が認められることである。但し、「治」「旦」の字は未だ筆を闕かない。従つて太宗の在世中に渡つて来た唐初鈔本の重鈔本かとも考えられ、書法に宿る謹嚴さも亦このことを証しているように見受けられる。

無注三十巻本は零碎な残編をも含めれば、十余種の旧鈔本が存すること既述の如くであるが、本書と対校可能なものは九条家本のみである（時雨亭文庫本との關係が最も注目されるがこれは後日に期するほかない）。<sup>(8)</sup> 斯波六郎博士によれば九条家本は、李善注本・李善五臣合注本・五臣注本等の有注本から正文のみを写し出したものではなく、蕭統の編纂せるままの若しくはほぼそれに近き姿の無注冊巻本の旧体裁を保つものと言われている。<sup>(9)</sup> 本書もまた、例えば第卅一行の「禴祀」に注して欄眉に「善本作禴祠」と見え、また第六七行の「結徒管」に「結徒為管<sup>五作</sup>」の異文注記があれば、当然その本文は無注冊巻本の旧を襲えるものであると言えようが、九条家本と比較すると猶多くの相異なる所が存する（比較は三都賦序及び蜀都賦に限り、森野繁夫氏の「文選集注（正文）校勘記」を参考にした。<sup>(10)</sup> 但し紙幅の關係で必ずしも網羅したものではない。各条先ず本書の行数を示し、本文を掲げ、（）内に九条家本を示す）。

342 贊（讚） 事者宜准其實〔集注本作贊。四部本・尤本・胡本作讚。〕

361 崗（岡） 纒紉（糾） 紛〔集注本作崗。明州本・袁本・四部本作岡。九条本旁記曰糾俗紉。〕

374 輝（暉） 麗灼鑠（爍）〔集注本作暉。各本作暉。集注本所引音決曰鑠舒灼反。〕

391 蠖蜺（徹夷） 山栖（棲）〔集注本作蠖蜺。九条本旁記曰五臣作驚鷗。四部本校語同。明州本・袁本作驚鷗。校語曰善本

作蠟蟻。又集注本所引音決曰蠟必列反。集注本作栖。四部本・明州本・胡本作棲。」

424 日往霏薇（非薇）〔集注本作菲薇。薇字九条本旁記並四部本校語曰五臣作微。明州本・袁本作微。集注本今案曰音決・五家・陸善經本薇爲微。〕

467 肴橘（核）四陳〔集注本・胡本作橘。九条本・明州本・袁本・四部本作核。四部本校語曰、善本作橘。李善注曰橘與核義同也。〕

483 經三陝（峽）之崢嶸〔各本作峽。集注本所引音決曰陝音洽。劉逵引楊雄蜀都賦曰入謂之狹。江水過其中。〕

488 誠（試）水客樣（纜）輕舟〔集注本作誠。他本皆作試。集注本所引五家說呂向曰誠使也。樣字集注本同。九条本・四部本・尤本・胡本作纜。九条本旁記並四部本校語曰五臣作漾。明州本・袁本作漾。校語曰善本作纜。集注本今案曰五家本樣作漾。〕

右によれば、四二四行「霏」字・四八三行「陝」字の如く、書者偶然の誤りから出たるかと疑われる異文のある反面、三七四行の「鑠」字（「陝」の字も同断であるかも知れぬが）の様に、唐代鈔本に同文に作る例もあつて、卒に九条家本と本書の優劣を論じることができない。概して本書の本文は「集注本」に同じいことは注意されよう。周知の如く「集注本」の正文は李善注本の正文に拠つていられると言われるが、本書と「集注本」の似通いは、本書の本文が李善注本の正文（或は集注本の正文そのもの）を写し出したものであることを意味しない。本書は「集注本」の独自異文とも一致しない所が認められるからである。その例を若干次に掲げる。（一）内に集注本を示す。

334 作者大氏（底）舉爲憲章〔各本作氏。李善注曰音旨。集注本音決曰氏音旨。本書旁記曰音旨。〕

392 龜（元）龜水處〔九条本・四部本・尤本・胡本作龜。九条本旁記曰五臣作元。〕

410 演以潛沫浸（溲）以線雒（絡）〔各本作浸。集注本音決曰浸子鳩反。又李周翰曰浸潤此地也。雒字九条本・明州本・袁本四部本作洛。尤本・胡本作雒。李周翰注曰綿絡皆水名。〕

429 其中則有鴻儔（鸞）鵠侶〔各本作儔。劉逵注曰鴻鵠多群飛。故言儔侶也。〕

492 而光耀（暉）洪流〔各本作耀。〕

493 酌醪酤割芳鮮〔九条本旁記曰善本作清。四部本・尤本・胡本作清。四部本校語曰五臣作醪。李善注引毛詩曰既載清酤。音決曰醪音勞。劉良曰醪酤酒也。〕

僅かな例からではあるが、これら異同の中には「集注本」の誤り（三三四行「底」字、四二九行「疇」字）と見られるものも存するが、本書の誤れる（四一〇行「雒」字）と想われるもの相半ばしている。又、明らかに偶然の誤写と考えられるものも存するが、多くは既に唐以前の旧鈔本に発するかと推定される異文である。前に述べた如く「九条家本」との対校で、本書の本文が屢「集注本」に適うことの事情は、両者がともに唐代鈔本の流れを汲み、それ故に能く蕭統原撰本の旧を全うしているからに他ならない（前掲四九三行「醪」字は、李善本以前の本文を伝えているのであろうか）。かくて本書は零巻ながら蕭統文選の原姿を彷彿とさせる貴重な資料といふことができる。

さて次に本書の本文の傍記に豊富に見える反切注と直音注の性格について言及する。音義書の類としては、周知のことながら「日本國見在書目録」には、

文選音義十李善撰

文選音決十公孫羅撰

文選音義十釋道淹撰

文選音義十三曹憲撰

文選抄韻一

などを録し、「隋書經籍志」に「文選音三卷蕭該撰」、「唐書芸文志」に「許淹文選音十卷」が見える。<sup>(12)</sup> 本書の音注も或はこれらの佚書に拠つたかも知れぬが今確める術はない（本書一五六行欄外注の「蕭音裁今案賦宜為裁音吠」は蕭該の音義の佚文か。また「弘決外典鈔」巻一に「曹憲云凡驗事曰案也」の佚文が見える）。しかるに「集注本」に於ける音注と比較した結果、その一部に「文選音決」（公孫羅の「音決」との関係は未だ詳らかでない）に合うものが存する。例えば（音注を便宜〔 〕内に示す）、  
400 修々〔昌氏反〕 隆富、卓〔丁角反〕 鄭埒〔力悅反〕 名、公檀〔市戰反〕 山川、貨殖〔市力反〕 私庭、藏鏹〔九兩反〕  
鉅萬、鈇〔普歷反〕 槻〔音規〕 兼呈、亦以財雄、翁〔許急反〕 習邊城、  
とあるのは、「集注本」所引の「音決」に殆ど同文の音注が存する。

音決修昌氏反、卓丁角反、埒力悅反、檀市戰反、殖市力反、纒居兩反、釶普歷反、槻音規、程音呈、翁許急反、(28ウ) 右の例で一致しないのは「纏」(集注本案語に「音決」の正文は「纏」に作ると言う)の反切上字のみであるが、これも同声字であつて異とするに足りぬ(因に「類聚名義抄」のこの字の反切は「房・兩反」(僧上二二〇)で、「居兩」の誤写と見做される)。

しかしながら、本書の音注全て「音決」に一致するかと見れば、次例の如く齟齬するものも見受けられる。

450 炫〔音縣〕服靚〔音靜〕莊、賈〔音古〕賈〔音茂〕帶〔直例反〕鬻〔以六反又之六反〕、舛〔昌元〕錯縱橫、異物譎詭〔古毀反〕、

この箇所<sup>13</sup>の当該「音決」は左の通りである。

音決炫音縣、靜音淨、賈音古、賈音茂、帶徒結反、鬻以六反、舛昌轉反、從子容反、譎古穴反、詭居毀反、(26ウ)

両者合致しない音決を検討すれば、「靚」(疾政切)の直音注は「淨」が正しく、「靜」は誤写が考えられる。「舛」の反切下字も元韻と彌韻で相異り、「切韻」に「昌亮切」とあれば、「元」は「亮」の訛と見做される。「詭」の反切上字も別字ながら同声である。これに対し「帶」の「直例」去声・「徒結」入声は、夫々「広韻」の「特計」・「徒結」の二切に対応している。本書には例えば四七一行「齋」に「協・以列反」、四四六行「駟」に「協・音悉」の音注が存し、この「帶」字の音注の不一致は叶韻を示すものかと思量される(「齋」・「駟」の協韻注は「集注本」所引「音決」に既に見えているが、「帶」字については前掲の如く協韻の注は無い)。

かように本書の音注は明らかに「音決」を出典すると認定されるが、中に「音決」とは一致しないものも存する。それらは「文選音決」から直截に引かれたもので、集注本所引「音決」と異文があつたものかも知れないとも考えられる(本書の欄眉に第二六行「決爲配字協普廻反善本作配」、第四二行「決作縣」等の「音決」佚文が見られるが、これらは恐らく「集注本」によつて後補されたものであろうが、行款に存する音注は「集注本」を経由したものではあるまい)。また次例の如く「音決」を遡入したとは考え難い音注も存し、上掲の如き隋唐間の文選学者の著述に拠れるかと疑われるものもある。

454 興〔音餘〕 輦雜沓〔徒力合反〕、冠帶混并〔府盈反〕、累穀〔古鹿反〕 疊跡、叛衍相傾、誼譁鼎沸、則噓〔莫江反〕 聒

〔音栝〕 宇宙、鶯塵張天、則埃壙〔於蓋反〕 曜靈、

「集注本」の音注は次の如くである。

音決興音余、冠古翫反、混胡本反、疊音牒、誼虛袁反、譁音花、噓武江反、聒音栝、張丁亮反、壙於蓋反、五家沓徒合反、鶯許驕反、埃音哀、(27ウ)

右によれば、本書は「集注本」の音注を忠実に逐録したのではなく、「并」・「穀」の如く他の出典を想定しなければならぬものも存する。

詮ずるところ、本書の音注は「音決」に拠りつつも、古佚の音義書に拠るかと思わしいものも存し、猶精深にその性格を吟味してみなければなるまい。

古佚書の問題としては欄外の標記に、今日既に佚亡した文選学の書が引用せられていることも注目される。

#### 9 集今案副鈔音爲福

85 鈔曰凌上也 銑曰瀆陸曰過也 集案鈔凌爲陸

#### 122 集案五家本和下有平字又將作當

これらは、今は伝を失つてしまった「集注本」巻第七の未だ存していた時の記録で、断片と雖も「集注本」に濾過された唐代諸注本の佚文として珍重す可きものである(この標記は「東京賦」「南都賦」に密で、「三都賦序」以下に疎であることは注意される)。同趣の標記は観智院旧藏巻第廿六及び時雨亭文庫藏菅家本巻第二にも認められるが、孰れも断章であるのは惜しまれる。

本書の訓点については加点の際の識語等が一切存せず、何時ごろ何人による加点であるかは不明とするほかはない。一体、本書の本文と全巻に亘る訓点及び音注は、同一人の筆跡でなく、その所用異体仮名字体(凡例参照)に拠れば訓点は院政初期(小林芳規博士の推定による)の加点の如く推定される(音注を加えた人物は加点者と同人かと想われる)。本書の訓点は、

朱筆でヲコト点、声点、墨筆で仮名とヲコト点が付されており、両者は対応している。ヲコト点は、星点は概ね朱点であり、線点は墨点であることを原則としており、附訓は全て墨書されており、この墨仮名には少くとも数手あることが確認されるであろう（例えば第八行目「葩瑤」の附訓「ミルツメ」は稍々肉太で、他の附訓と幾分趣を異にしている）。この他に基だ注目す可きものとして、角筆点が存在している。例えば第二行目「舜慕」・七行目「膺」・十三行目「稽」に各「ケイキイ」「井ヨウ」「セン」の字音注が、角筆によって記されている（翻刻に当り角筆点を出来る限り拾ったが、第百二巻については裏打ちがあつて肉眼によつて検知すること能わず、割愛せざるを得なかつた）。

以上の如く、本書の訓点は墨筆によるもの、朱筆及び角筆の計三種である。このうち角筆は専ら音訓注・補読・返点に用いられ、例えば第四十行目「疆場」に「キヤウエキ」の角筆の字音注が存するが、これを更に後筆墨書（稍々肉太）によつて字に起していることを参稽すると、角筆及び稍々肉太の墨訓は学習者が、もとから加えられてあつた訓点に、二次的に附加したものと思量される。

本書所用の異体仮名字体及びヲコト点は、凡例に帰納して掲げた。ヲコト点に関して、星点は問題が無い。線点にはいくつかの特長が有り、所謂築島裕博士の提唱される「古紀伝点」と推定される。紀伝点の古体については未だ審らかでない現在、院政期のヲコト点の例として、この方面の研究に資する所もあろうかと考へる。

本書の訓法が何家の訓法に基づくものか、最も関心の寄せられる所であるが、識語等の明徴を欠く。纔かに正慶元年藤原師英の識語を有つ九条家本巻第二との訓法の比較に拠つて、聊かの手懸りが得られるであろう。<sup>(14)</sup>

周知の如く、九条家本は実際には式家の正慶——康永年次の写点本を、南北朝期に重写したものであり、更にその淵源を辿れば、式家本来の家説に、菅・江両家の訓説を校合したものと<sup>(15)</sup>言われている。このような渾淆した訓説から、各博士家の訓説を類別することは、極めて至難なことと言わねばならない。他に孰れかの博士家の証本があれば（現に菅家本即ち寛喜二年菅原在公書写本が存するが、前述の如くこれを披閲することは許されない）甚だ好都合であるが、そのようなものを

知らない。

ここに武家の訓法を伝える別の資料が存する。「三教指帰」の現存最古の注釈書として知られる式家敦光の「三教勸注抄」がそれである。(16) 同書には、屢「文選」が引載されており、今その例を本書・九条家本・勸注抄の順に掲げ、三者の訓法を対照してみる。

164 凡・人心是ハシニン所學をフル・體安ハヤス所習をフ。鮑肆のイチクラノ・不知ル其臭クサイ。翫ナラフテナリ其所以のニ先入ツイリン。

○凡・人心是マナフ所學をフル・體安ハヤス所習をフ。鮑肆のイチクラ不知ことは其臭クサイことを。翫ナラフテナリ其所以のニ先入ツイリン。

○人の心ハシ是ニ所學をル・體安ハス所習を。鮑肆のクラ不知ノ其臭ノ。翫ナリ其所以ニ先入ニ。

169 惘ホレタルコト然シ若醒シサカヤモヒセルアタ朝ツカレタル・罷のレ夕奪ムハ、レタルカタマシ氣カ・褌スルモノ之ノ爲ス者者。

○惘トホレたること然ト若醒サカヤマヒセルア朝ムハ、レ・罷ムハ、レタルコト夕奪ムハ、レタルコト氣ムハ、レタルコト・褌ムハ、レタルコト之スル之スル爲スル者者也。

○惘タルコト然タル若醒サカヤマヒセル朝罷ツカレタル夕奪ハ、レ氣ムハ、レタルコト・褌ムハ、レタルコト之スル之スル爲スル者者。

253 吝マラフトハ賦サニ醉ヒタリ・言歸ワレハ主稱露未晞ナムト云ことを。主稱露未晞アルシハ。

○吝賦サニ醉ヒタリ・言歸ワレハ主稱露未晞ナムト云ことを。主稱露未晞アルシハ。

○吝賦サニ醉ヒタリ・言歸ワレハ主稱露未晞ナムト云ことを。主稱露未晞アルシハ。

401 百藥マラウトハ・灌タリワレカヘナムアルシハ・澁トアツマリ・叢トシ・寒カウハシ・并ナ・冬カウハシ・馥なるクヒ。異類クオホシ・衆夥ライアカナ。于ニ何ニ・不サラム育育。

文選卷二「管見記」紙背解説



○百藥・灌叢トアツマテ 寒卉・冬馥シ・異類なるク・衆夥クオホシ。于オイテカナニ何不育らん。

○百一藥灌一叢ソウトシテ 寒一卉冬一馥シ異類ナル衆一夥ヒオホク于オホシ何不育ニラムセ。

右の諸例によれば、訓点に繁簡の差があり正確を期し難いが、ほぼ類似した訓法かと思受けられる。<sup>(17)</sup>百六九行目の訓みは「…魄ヲ禡ハレタルガ〔之〕、爲ル者ノ若シ」と本書は訓んでいるが、九条家本・勘注抄では誤読しているものと見做される。また「禡」字について、本書に「トラケ」の別訓（合点あり）があり、四百一行目「于」字に附訓とラコト点の二訓が見えるなど微細に見れば小異が存する。この比較から本書も式家の訓法を伝えるかとも思われるが、九条家本と比較すると、猶次に示す相違点がある。

〔則〕の訓法

○本書「トキハ」を承けるに對し、九条家本「コトハ」を承く。

111 奢を改メ儉に即クトキは〔則〕美を合へたり〔乎〕（奢りを改メて儉に即クことは〔則〕美を合へたり〔乎〕）

112 登て封シ降りて禪スルトキは〔則〕徳を齊シウセリ（登て封シ降りて禪することは〔則〕徳を齊せり〔乎〕）

〔所以〕の訓法

○本書「ユエヲ」と訓み、九条家本「ユエノコトヲ」と訓む。

171 其の談ヲモヒシとスル〔爲〕所ヲ以を忘レ、其の夸オコリとする〔爲〕所ヲ以を失フ（其の談とスル〔爲〕所ヲ以を忘レ、其の夸とする〔爲〕所ヲ以のこを忘レ、其の夸とする〔爲〕所ヲ以のこを失フ）

〔況〕の訓法

○「イハムヤ…ヲヤ」と訓み、「イハムヤ…ヤ」に読む。

133 況ヤ帝業を纂ツギ（テ）而て天位を輕カルムスルヲヤ（況ヤ）帝業を纂（テ）而て天位を輕ムヤ）

157 況(ヤ)初(メ)甚<sup>ハナハ</sup>夕<sup>ツカ</sup>泰ナルニ〔於〕制セラル、ヲヤ(別訓に「制シテハ」がある)況(ヤ)初メ〔於〕甚<sup>ユ</sup>夕泰なるに制らるルヤ)

「者」の訓法

○本書は「モノ」と訓み、九条家本不読とする。

138 夫(レ)君たる人の者は夫(レ)君たる人には〔者〕

341 詩とする〔爲〕者は〔詩とする〕〔爲〕ことは〔者〕

「格助詞の用法」

○本書「ヲ」格に訓むところ、九条家本「ニ」格に訓む。

19 旆<sup>ハタ</sup>已に〔乎〕郊<sup>メク</sup>眇を回りヌ(郊<sup>メク</sup>眇ニ)

38 帝<sup>セキ</sup>藉の〔之〕千<sup>フサ</sup>畝を脩ム(千<sup>フサ</sup>畝に)

「音便型」

28 四<sup>ヨロム</sup>靈戀て〔而〕(戀<sup>ヨロム</sup>て〔而〕)

26 然て後に上<sup>タフト</sup>帝を〔於〕明堂に宗<sup>タトヒ</sup>ヒ(然後に上帝を〔於〕明堂に宗<sup>タトヒ</sup>て)

75 罽<sup>アミ</sup>を解<sup>トキ</sup>麟<sup>ハナ</sup>を放ツ(罽<sup>アミ</sup>を解<sup>トキ</sup>て麟<sup>ハナ</sup>を放ツ)

また、本書の如き紀伝点を加点する漢籍に関しては、濁音符の使用状況から何家の系統の資料かを判定することができ、遺憾ながら本書には濁音符は極めて稀れで、僅かに

236 穰<sup>シヤウ</sup>而<sup>タウ</sup>羊<sup>タウ</sup>橙<sup>タウ</sup>除<sup>タウ</sup>耕<sup>タウ</sup>反<sup>タウ</sup>

386 鷓<sup>シヤウ</sup>鴒<sup>タウ</sup>魚<sup>タウ</sup>角<sup>タウ</sup>

等の例がある。この型からは、本書は菅家本かとも考えられ、訓法の特色も菅家本の特徴に適うようである。「者」を不読と

しないなど、尚疑問は残るが<sup>(18)</sup>。

菅家本ではないかとは、既に本書の作品分属から推定したところである。本書第三百廿六行の欄外注に、「槐也江中納言被申也」(玉樹の語に対する注)とあり、これは「江談抄」に見える「江家私記」の記事に一致している(江家の「文選」訓説を指す)。

又問云、文選三都賦序云、楊雄賦甘泉、陳玉樹青葱云々、則所賦無實也、而坤元錄云、甘泉宮有玉樹、楊雄所賦是也、其義如何、被答云、此書籍相違常事耳、但王樹者何樹乎、僕答曰、不知、被命云、玉樹者槐也、是江家私記也、(醍醐寺本水言抄24ウ)

この注記があることは、却って本書が江家の資料でないことを証しているよう。

更に本書には平安初期に於ける大学寮の師の講説「師説」が残存していることが認められ、かかる由緒深い「師説」を伝承していることこそ、何よりも菅家本の証拠である。<sup>(19)</sup> 例えば、字句校異に関するものとして、

98 師説間字異本

122 集案五家本和下有平字又将作當師説平字異本

の欄外注が見える。この「異本」の語に注目すれば、或は校合に用いた本の注記が適残ったかとも疑われよう。ところが訓説についても、四百廿一行の「罇發」に「音貪 エメリ」の訓注が見えるが、「和名抄」(廿卷本)に、

栗刺<sup>罇發</sup> 文選蜀都賦云榛栗罇發<sup>罇音呼亞反罇發師說惠女利</sup> (十卷本に「上音呼亞反師說惠米利」)

とあって、この訓が「師説」であると知れる。同様の例は、八二行の「俛子」の訓注「之忍反 ノコワラへ」について、同じく「和名抄」に次の記述がある。

童<sup>俛子</sup> 禮記注云童<sup>徒紅反</sup> 和良波 未冠之稱也文選東京賦注云俛子<sup>俛音之忍反</sup> 童男童女也(真福寺本和名類聚抄12ウ)

以上は孤証に過ぎぬものであるが、本書に「師説」が残存することの証左である。

「師説」に関連して、本書にはまた声点付きの和訓が存する（その多くは「類聚名義抄」に同訓を検索できる）。漢籍の和訓に差された声点の機能については、それが「師説」やそれに準ずる平安初期の典拠ある訓法を明示する（或は由緒ある古訓を伝えるための）用を果していることが判っている。<sup>(20)</sup> 本書の声点付き和訓の性格も正しく同じものと考えられる。(一) 内は観智院本「類聚名義抄」。

46 鞞ヤ、シリソク（上上平上上〇）〔鞞ヤ、シリソク（上上平平上濁平）僧中91〕

49 鏗ツク（上平）〔鏗ツク（上平）僧上133〕

153 剿ツクシ（上上平）〔剿<sup>キヌ</sup>ツクス（上〇〇）僧上81〕

159 系ツク（上上）〔系ツク付 法中110〕

168 戒イマシメ（〇〇上上）〔戒イマシム（平平上平）僧中42〕

244 醪敷サカアフラ（上上上上〇）〔醪敷サカアフラ（上上上上濁平）僧下56〕

244 浮蟻キノサカキサ、（〇〇上上上上〇）〔酒蟻サカキサ、 僧下25〕

かように本書の和訓に平安初期の「師説」が投影しているとすれば、翻って前述の行款に見える漢字音注も、恐らくは大学寮に於ける音博士等の「師説」を伝えていると想像することができよう。

以上なお多くの疑問と躊躇いを残しながら、本書が菅家訓点資料であることの情況証拠を幾つか挙げてみた。本書によって清公・是善以来の菅家累代の人々の「文選学」の一斑を知ることができようかと思う。精審を欠く論で意に満たぬが、今はこの学界未知の資料を、汎く世に紹介することを以て深く慶びとするのみである。

最後に、貴重な典籍の影印・翻刻を御清諾賜った宮内庁書陵部に対し、深甚なる謝意を表し、あわせて小林芳規先生をはじめ鎌倉時代語研究会の方々に、さまざまの啓沃を蒙ったことを銘記して感謝したい。

注

- (1) 『図書寮典籍解題』(歴史篇)百三十八頁参照。
- (2) 日野俊光は資実曾孫。「公卿補任」に拠れば、「正安三年十月廿四日權中納言辞退、正和五年壬十月十九日任按察使、文保元年六月廿一日任權大納言」の履歴である。
- (3) 「朝日新聞」昭和五十六年十月廿五日紙上及び『アサヒグラフ』昭和五十七年七月一日発行「冷泉家時雨亭文庫」特集号に紹介記事が載っている。
- (4) 「白氏文集」卷十六の「山居」(983)より、「湖山閑望」(1007)迄を収め、「文集卷第十六」の大尾がある。
- (5) 注3の『アサヒグラフ』所掲の写真に、巻緒にこの文字を記した附札が付いたものが見える。
- (6) 斯波六郎博士「文選諸本の研究」(文選索引第一冊解説)付録「九条家本文選解説」参照。
- (7) 「世」の欠筆は第五百七行、「民」のそれは第七七行にその例を見ることができよう。猶「民」を「人」に改めた例は第五六行に見ゆ。因に第十四行の「虎」字が闕筆となっていることも指摘しておく。
- (8) 該本には次の識語がある。  
本云寛治七年癸酉四月乙五日辛亥申二以家秘説點合了」菅原時登」抄了 式部少輔菅在公」以當家秘説讀合礼部二千石訖」翰林主人菅(花押)」奉受秘説訖」藤木光吉(花押)」
- (9) 注6に同じ。
- (10) 森野繁夫博士『文選雜識』第一冊所収。
- (11) 九條道弘氏儲藏「文選集注卷第八」(京都帝國大學文學部景印舊鈔本第七集所収)による。
- (12) 敦煌本「文選音」殘欠(ペリオオ<sup>2833</sup>) (敦煌秘籍留真所収)が、現存する唯一の音義書である。
- (13) 「王仁响刊謬補缺切韻」による。
- (14) 卷第二には次の本奥書がある。  
 本云「正慶元年大呂五日書寫之了」散位藤原師英」同廿三日寫點墨同勘物了 師英」同夜半朱點畢 師英」  
 なお、九条家本の引用は中村宗彦氏『九条家本文選古訓集』第一集・第二集に拠った。
- (15) 小林芳規博士『平安鎌倉漢籍訓讀の國語史的研究』第五章「博士家各家の訓讀法の特徴」第三節参照。
- (16) 敦光自筆の「勘注抄」は存しないが、式家の訓を残存するものと見做して、次の資料を用いた。

○太田次男氏「尊經閣三教勸注抄について」(成田山仏教研究所紀要第五号)

○太田次男氏「平安末写三教指帰敦光注について——解題と編印——」(史学第四十一卷一号)

○正中二年写三教指帰註(覚明註)(天理図書館蔵本)

(17) 本書と式家の訓みが似ている事情として、「文選」については式家独自の訓読態度によらず、菅家の訓読によつてゐるかと考へる。「明衡往来」に菅江両家の証本を借受けたことが見え、事実、九条家本卷十五の奥書によれば、同巻は菅家本であることなど、右の想像を援ける。

(18) 本書には次の例の如く、二訓があつてその一方に合点の附される場合があつて、或は別の家説を校合したものかと疑われる。( )内は九条家本の訓。

18 陳ツラナレリ (陳ツラナレリ)

57 息イコフ勤ツトメタルを (息イコフ勤メを)

178 尚マサラム (尚マサラム)

201 密トナカレトナカレ (密トナカレトナカレ)

(19) 「師説」に関しては、注15同書第二章「平安初期の漢籍訓讀語の推定」第六節「訓點資料における師説について」を参照。

(20) 注15同書第二章第五節「漢籍における聲點附の和訓の性格」参照。

### 補注

「日本国見在書目録」に、「文選鈔」と「文選音決」をともに公孫羅の著作としてゐることと、両書の文選依拠テキストが異なることをめぐり、選學者の間にも、両書の撰者について未だ定説をみない。結論を異にするが、内徴によつて作者を推定したものに、次の論がある。

狩野充徳「文選集注所引音決撰者についての一考察」(『小尾博士<sup>退休</sup>記念中国文学論集』所収)

森野繁夫・富永一登「文選集注所引『鈔』について」(『日本中国学会報』29集)

補注

藤原師道が惟宗孝言について学んだ文選は三十巻本であったとその日乗に見える（応徳二年十一月廿五日記文）。恐らく師道の使用したテキストは、院政初期加點本の本書の如きものであったろうと推定される。

付記

初校時に、小林芳規先生の校閲を忝くし、数々の不逮を御垂教戴いた。銘記して感謝申し上げます。